

目次

第1日 5月30日(土)

ドイツ語教育部会講演(13:00~14:00) B会場(2階1021)1

「日本人の異文化理解を問い直す — 外国語教育の視点から—」

大谷 泰照(名古屋外国語大学)

ポスター発表(13:15~14:45) 14階ロビー・ポスター会場2

(ポスター発表は同時進行です)

- ・Verfassen von E-Mail-Bitten in der Fremdsprache Deutsch Axel Harting
- ・ドイツ語版『あさきゆめみし』の対話を解く 大野 祐子
—『源氏物語』の日独言語文化対照比較のケース・スタディとして—
- ・ドイツ語教員養成・研修講座 2007年~2009年の紹介と報告
柿沼 義孝, 境 一三, 中川 慎二, 藤原三枝子
正木 晶子, 森田 昌美, 吉島 茂, 鷺巣由美子
- ・日本におけるグスタフ・クリムト受容 浅井 麻帆, 亀野 晶子, 國枝 綾乃
- ・ノヴァーリスの詩における算術的志向 上野 ふき
—ライプニッツの普遍記号学を媒介として—
- ・教員再研修のための協調学習支援基盤の構築および展望について
濱野 英巳, 倉館 健一, 板宮 朋基, 谷内 正裕, 江面 快晴

シンポジウム I (14:30~17:30) B会場(2階1021)7

話しことば研究の射程

Tragweite der Erforschung gesprochener Sprache

司会: 山下 仁, 白井 宏美

1. 学術的コミュニケーションとしての「講演のあとの議論」の分析 中川 慎二
2. 日本語を母語とするドイツ語学習者の言語変種の変化 平高 史也
— 留学前後の発話データを手がかりとして —

- | | |
|--|-------|
| 3. 教室内インタラクシオンにおける「自然な」コミュニケーション — 遠隔授業システムを用いたテレビ会議を例として — | 星井 牧子 |
| 4. チャット・コミュニケーションにおける挨拶場面の特徴 — 日独対照研究 — | 白井 宏美 |
| 5. コミュニケーション行動における敬意表現の日独比較 | 山下 仁 |

シンポジウムⅡ (14:30~17:30) C会場 (2階 1022)11

Auto-/Biographie

Erzähltes Selbst, erinnerte Bilder

Moderation: Michael Mandelartz, Eriko Hirose

- | | |
|--|--------------------|
| 1. Der Ursprung der neuzeitlichen Autobiographie Luther – A. H. Francke – Goethe | Michael Mandelartz |
| 2. Ein Gegenkonzept zur literarischen Autobiographie? Freuds Auseinandersetzung mit Kindheitserinnerungen | Eriko Hirose |
| 3. Bemerkungen zur Funktion der Goethe-Biographie in Kamei Katsuchiros <i>Die Menschenerziehung</i> | Satoshi Nagakawa |
| 4. Benjamins <i>Berliner Kindheit um Neunzehnhundert</i> Zur Dialektik von Erinnern und Vergessen | Takao Tsunekawa |
| 5. Das Leben wiederholen Zum Problem der Lebenserzählung bei Peter Handke | Tomoko Somiya |

口頭発表: 文学・文化・社会 1 (14:30~17:05) D会場 (14階 1143)16

司会: 井戸田総一郎, 瀧井美保子

- | | |
|--|-------|
| 1. 18世紀後期の政治的家庭劇と初期ナショナリズム | 菅 利恵 |
| 2. ドイツ民族主義と北欧 「郷土芸術運動(Heimatkunstabewegung)」と 「血と大地文学(Blut- und Boden-Literatur)」における北欧文学の受容 | 中丸 禎子 |
| 3. 「ドイツ家庭文庫」 その成立・発展, およびドイツ民族商業補助者連合とのかかわりについて | 竹岡 健一 |

4. 批判理論のメディア戦略 原 千史
アドルノによる〈ラジオの社会理論〉の構想をめぐって

口頭発表：文学・文化・社会 2 (14:30～17:05) **E 会場** (14 階 1146)19
司会：小林信行, 遠藤紀明

1. Der Sänger singt – aber wer erzählt? Andrea Kuklinski
Sehen, Hören, Sagen und die Autorität des Erzählers im
Nibelungenlied
2. „Entartet Geschlecht! Unwert der Ahnen!“ Asuka Yamazaki
– Das moderne Irlandbild in Richard Wagners *Tristan und
Isolde*
3. 中世文学における「テキスト」と「挿絵」の相互関係に対する一考察 浜野 明大
– 初期中高ドイツ語版『創世記』の挿絵を手がかりに –
4. ドイツ中世後期における Privatbriefe 草本 晶
– その形式と機能 –

口頭発表：語学 1 (14:30～17:05) **F 会場** (15 階 1153)22
司会：宗宮 好和, 富重与志生

1. 心的近さ・直接的知覚を軸とする原理について 三瓶 裕文
2. ドイツ語新聞記事における言い換え表現について
稲葉 治朗, 勝田 由貴 (研究協力)
3. 16 世紀後半における印刷技術と正書法の発展 齊藤 和史
植字工と読者の相反する関心事をめぐって
4. 意味変化の記述へ向けて 薦田 奈美
移動動詞をはじめとする辞書記述の分析

シンポジウムⅢ (10:00~13:00) B会場 (2階 1021)26

カフカ・シンポジウム

ー カフカ, プロート, ホーフマンスタール, ショーレム, ツェラーン

Kafka-Symposion

Kafka, Brod, Hofmannsthal, Scholem und Celan

司会: 吉野 英俊

1. 労働者傷害保険局員としてのカフカ 吉野 英俊
2. プロートとカフカの『アメリカ』(失踪者) 長田 浩
3. 世紀転換期の身体・舞踏文化 金子 祥之
ホーフマンスタールとカフカの視点から
4. ゲルショム・ショーレムのカフカ理解 石原 竹彦
5. パウル・ツェラーンのカフカ受容 富岡 悦子

口頭発表: 文学・文化・社会 3 (10:00~12:35) D会場 (14階 1143)30

司会: 佐藤 俊哉, 渡辺 徳美

1. ヘルダーとレンツにおけるケーニヒスベルク 今村 武
2. 『子どもと家庭のメルヒェン集』の「十二人兄弟」(KHM9) 田中 千裕
における二重構造
3. フンボルトの教養理念について 石澤 将人
ー ギリシア観と形式的教養 ー
4. ゲーテ『悲劇ファウスト』における「最高の美」 平松 智久
ー 「曇り」としてのヘレナ試論 ー

口頭発表: 文学・文化・社会 4 (10:00~12:35) E会場 (14階 1146)33

司会: 須永恆雄, 山田哲平

1. ハイネにおける「もてなし」(Gastfreundschaft)のモチーフについて 立花 哲雄
2. 原体験の象徴としての他者 野端 聡美
メーリケ『画家ノルテン』における「ジプシー」女性像について

3. Über die Bedeutung Hölderlins für Georges Poetik in den Gedichten
,Hyperion I-III‘ Kenichi Onodera
4. カタルシスの歴史哲学的意義 森田 團
ヨルク伯によるギリシア悲劇解釈

口頭発表：語学 2 (10:00～11:55) F 会場 (15 階 1153)36
司会：三瓶 裕文, Jutta Kowallik

1. 心態詞の背後にある認知的枠組み 宮下 博幸
— 平叙文に現れる心態詞の分析 —
2. ドイツ語を母語とする幼児の心態詞習得 牛山さおり
3. 時間節の階層性と談話との接点 高 裕輔

口頭発表：ドイツ語教育 (10:00～12:35) G 会場 (15 階 1156)38
司会：伊藤 真弓, 松澤 淳

1. ドイツ語母語話者の言語調整と学習者の理解プロセス 石塚 泉美
— 少人数グループレッスンを例として —
2. Das Curriculum als Hypothese: Michael Schart
5 Jahre Evaluation im Intensivkurs Deutsch an der Juristischen
Fakultät der Keio Universität
3. リズムと身体性を重視した発音練習の可能性 三ッ石祐子, 林 良子
— 実験授業「ドイツ語のリズムにのろう！」を通して —
4. ERP を用いたドイツ語無声子音の認知 伊藤 直子, 島崎のぞみ
— 日本語母語話者の聴取に関する一考察 —

ブース発表 (11:30～13:00) H 会場 (14 階 1141, 1148)41
(ブース発表は同時進行です)

- 1141 : 方言レベルの音声データに見られる多様な縮約形 藤井 雄吾
(Kontraktionsform)について
- 1148 : „Also, der Lars sagt, ...“ — Bertlinde Vögel, Anja Hopf
Flüssig sprechen lernen – Lernmaterial für Lernende auf dem A1- und
A2-Niveau.

第1日 5月30日(土)

ドイツ語教育部会講演 (13:00~14:00) B会場 (2階 1021)

「日本人の異文化理解を問い直す ― 外国語教育の視点から ―」

大谷 泰照 (名古屋外国語大学)

日本もアメリカもヨーロッパ諸国も、かつては異言語に対する関心の比較的低調なお国柄であった。しかし、日本は明治以後、そしてアメリカとヨーロッパ諸国は第2次大戦後、異言語に対するそんな姿勢を大きく改めることになる。

日本の場合は、薩英戦争・馬関戦争、太平洋戦争、日米経済戦争と、3度の戦争に敗れる度に、日本語一辺倒から英語一辺倒、とりわけ「英語国語化論」や「英語教育用語化論」に急転し、その往復運動のサイクルを今日まで重ねてきた。それは、日・英語以外の言語・文化には目もくれない偏狭な姿勢を生んでしまった。いわば、日本語か、もしくは英語か、という一元的言語文化志向である。

アメリカが、宇宙開発戦争、ベトナム戦争、9.11の対異文化戦争と、3度の戦争の敗戦から学んだものは、自らの母語がいわゆる「国際語」の英語であるために抱える陥穽の大きさであった。それを克服するために生まれたのが、社会人をも含めて「英語+1言語」を学ぼうとする『21世紀の外国語学習基準』であり、『国家安全保障言語構想』である。いわば、二元的言語文化志向である。

ヨーロッパでは、普仏戦争、第1次大戦、第2次大戦と、3度の戦争を相戦ったドイツとフランスの反省が、EUという「不戦共同体」の一大プロジェクトを生み、その言語政策として、社会人をも含めて「母語+2言語」を学ぼうとする「リングア計画」を構想した。いわば、多元的言語文化志向である。

母語以外の他言語に対して無関心なかつての言語的「点の時代」から、日本は今や、日本語から英語へと、点から点への往復運動を繰り返す「点の移動の時代」にあるといえる。これに対してアメリカは、英語とそれ以外の1言語の距離関係を意識する「線の時代」にあるとみることができる。その「線の時代」の特定言語「一辺倒」の弊害を克服する道として今日模索されているのが、母語と母語以外の2言語の3点を頂点として、相互の距離・角の関係位置を客観的に測定するいわば言語・文化的「三角測量」である。EUでは、今日、この新しい「面の時代」の実験が実地に始まっているといえる。

たしかに、自分の言語に加えて、さらに相手の言語まで学ぶという異言語の学習は、少なくとも 20 世紀の前半までは、敗者や弱者の側に課せられたハンディと考えられてきた。しかし、20 世紀も後半に至って、むしろ相手の言語の学習は新たな発想や情報の獲得であり、それは敗者や弱者の条件というよりも、逆に自らの立場を有利に導くための勝者や強者の条件であるという教訓を、近代の欧米諸国民は度重なる戦争の体験から学びとったと考えることができる。「点の思考」を超えたアメリカの「線の思考」であり、さらに「線の思考」を克服した EU の「面の思考」である。

ポスター発表 (13:15~14:45) 14 階ロビー・ポスター会場
(ポスター発表は同時進行です)

・ Verfassen von E-Mail-Bitten in der Fremdsprache Deutsch Axel Harting

Die Beobachtung, dass japanische Deutschlernende in ihrer E-Mail Korrespondenz mit deutschen Muttersprachlern häufig Fauxpas in Bezug auf Höflichkeitskonventionen begehen, hat mich zu einer sprachwissenschaftlichen Untersuchung veranlasst, in der Unterschiede zwischen deutschen und japanischen Schreibstilen ermittelt und Schwierigkeiten der Lernenden beschrieben werden sollen.

Meine Untersuchung stützt sich auf ein Korpus von jeweils 100 experimentell erhobenen deutschen und japanischen E-Mail-Bitten sowie 40, von japanischen Deutschlernenden geschriebenen, E-Mails mit retrospektiven Befragungen. Die Daten wurden auf Basis von Erkenntnissen aus dem Bereich der kontrastiven Pragmatik sowie der Textlinguistik auf formelle, sprachliche und strukturelle Eigenschaften untersucht (vgl. Blum-Kulka et. al, 1989; Dürscheid, 2007; Mayring, 2003). Dabei wurde die Frequenz und sprachliche Gestaltung einzelner, Bestandteil einer E-Mail-Bitte bildender, Textteile, kontrastiv untersucht. Besondere Aufmerksamkeit wurde der Realisierung der Bittsequenz geschenkt.

Als Ergebnis dieser Analyse geht hervor, dass deutsche und japanische E-Mail-Bitten sowohl strukturell als auch sprachlich systematisch voneinander

abweichen. Bei den in der Fremdsprache Deutsch erstellten E-Mails lässt sich häufig ein Transfer aus der Muttersprache beobachten, wodurch sich die beobachteten Verstöße gegen Höflichkeitskonventionen erklären lassen. Durch die ermittelten Ergebnisse erhoffe ich mir, einen Beitrag zur Schreibförderung im japanischen Deutsch-als-Fremdsprache Unterricht zu leisten und der Unterrichtspraxis neue Impulse zu verleihen.

・ドイツ語版『あさきゆめみし』の対話を解く

— 『源氏物語』の日独言語文化対照比較のケース・スタディとして—

大野 祐子

11世紀初期に成立した紫式部『源氏物語』は、十数種類の言語に翻訳され、その影響をうけた映画や舞台、アニメ等が多数存在する。中でも大和和紀『あさきゆめみし』（講談社 1979-93）は、『源氏物語』の漫画版として高い評価を得ており、新書版全13巻中1～3巻がドイツ語訳されている〔Waki Yamato (übers. v. Keiko Sato u. Heidi Hahn): *Genji Monogatari: Asakiyumemishi*. Böblingen (OKAWA Verlag) 1992-3〕。本発表では『源氏物語』と漫画『あさきゆめみし』、それぞれのドイツ語訳という4作品を比較し、ドイツ語訳『あさきゆめみし』が、時代も言語も異なる日本文学『源氏物語』の表現の特徴を正確に捉えていることを検証する。

漫画『あさきゆめみし』は、12世紀には発生した『源氏物語』の絵画化の流れを汲み、絵による物語世界への接近をはかるが、原作の表現効果の一部を喪失している。その失われた表現効果が、漫画のドイツ語訳に再現されているのである。たとえば、『源氏物語』の理解の鍵となる敬語表現は、漫画作品や英訳、複数の現代日本語訳では不十分なかたちとなっている。特に男女の逢瀬の場面に関しては、原作では敬語を排し「男」「女」と記すことで、社会的な立場から放たれた二人の世界観を表現する。一方、主人公「光源氏」と父帝の後「藤壺の宮」との逢瀬の場面では「藤壺」を「女」とは記さず、そこから、源氏を慕いつつも拒絶する「藤壺」の意志が読み取れる。漫画のドイツ語訳の当該場面では、「藤壺」による *du* と *Sie* の使い分けで、上記の工夫に匹敵する世界観を表現している。本発表ではこのような男女の対話場面を中心に考察する。

・ドイツ語教員養成・研修講座 2007年～2009年の紹介と報告

柿沼 義孝, 境 一三, 中川 慎二, 藤原三枝子
正木 晶子, 森田 昌美, 吉島 茂, 鷺巣由美子

大学教育の質保証が求められるようになり、それに伴いどの大学でもFD (Faculty Development) が義務化されるようになった。加えて、大学における英語教育偏重がますます進む中、ドイツ語教員には、より質の高い授業を提供する力量が求められており、ドイツ語教員養成や教員研修の必要性・重要性はますます高まっているといえよう。

日本独文学会、ドイツ語教育部会、東京ドイツ文化センターの共催事業『ドイツ語教員養成・研修講座』は、以下の3点について十分な能力を養成することを目的としている。1) ドイツ語教育について共通の理論的基盤を獲得する。2) 独力でシラバスを編成し、授業プランを立てて実践できる。3) 外国語教育を含むカリキュラム全般について科学的根拠に基づいた責任ある発言ができる。これらの目的のために、本講座は以下のような運営の理念に基づいて実施されている。1) モジュール方式でテーマを設定し、オンライン授業を中心に学ぶ。2) 原則、毎月テレビ会議方式のワークショップを開催する。2007年より、より多くの会員が講座に参加できるように、関東は慶應義塾大学日吉キャンパス、関西は甲南大学の二か所を会場とし、テレビ会議方式をとっている。3) 授業参観および授業実習を行い、講座で学習した内容を実践と結びつける。

ポスター発表では、本講座で行ってきたオンライン授業 (moodle 使用)、課題レポート、それを基にしたワークショップの様子などを紹介するとともに、会員の皆様のご意見を伺い、講座の改善に努めたい。

・日本におけるグスタフ・クリムト受容 浅井 麻帆, 亀野 晶子, 國枝 綾乃

日本においては現在、「分離派」といえばウィーン分離派をさす。ウィーン分離派の中で特に人気があるのは、画家グスタフ・クリムトである。このことは、美術展覧会でウィーン分離派やクリムトがしばしば取りあげられたり、クリムトに関する書籍が数多く出版されたりしていることに明らかである。しかし、もともとは、ウィーン分離派は、日本では戦前より建築・工芸界で人気があった。1910年代には、ウィーン分離派に影響を受けた建築物や家具、着物が数多く登場した。一方で、クリムトは戦前には現在ほど知られてはいなかった。いくつかの美術雑誌にクリムトを取り上げた

記事があるが、その受容のされ方は随分と冷めたものであった。日本でクリムトの人氣が出始めたのは、比較的最近のことなのである。1970年代、海外で「ウィーン世紀末」についての総合的な研究が始まる。1980年代になって、「ウィーン世紀末」をテーマとした大きな展覧会がいくつかの都市で開かれ、「ウィーン世紀末」文化がにわかにかき目されるようになった。こうした海外の動向が、日本でクリムト人氣に大きな影響を与えた。現在の、ウィーン分離派＝クリムトという見方は、戦後の美術受容とのかかわりの中で作られたものである。クリムトあるいはウィーン分離派の受容は、日本において、戦前から見うけられるものの、戦前と戦後の受容には大きな隔りがある。

・ノヴァーリスの詩における算術的志向 — ライプニッツの普遍記号学を媒介として
上野 ふき

今日のコンピューター言語を形成しているライプニッツにおける形而上学と普遍記号学を介して、ノヴァーリスの小説『青い花』の遺稿にある「数字と図形の詩」の一解釈を行う。まず、ノヴァーリスが『対話・独白』という小品の中で、正しい会話とは単なる言葉遊びであり、人はまた、言葉自体が数式のようなものだということに気づかなければならない。と述べていることから、ノヴァーリスは、数字と図形は記号言語（世界の物事を説明するために私たち人間が最も簡単に用いることのできる、数式も含めた広い意味での表現方法のひとつ）と捉えていたと考えられる。「数字と図形の詩」では、そのような記号言語では世界を理解することは不可能だということが表されている。これは、ライプニッツの『形而上学』における「実体」と神の関係と、「実体」の表象についての解釈に通ずる。それは、神の眺めは常に真であるゆえに、個々の実体の表象も真であるが、実体から出てくる判断には誤りもあるというものである。言語を用いて真理を説明したつもりになっている者は、言語という記号のフィルターを通して自己内世界の表象を見ているにすぎないがゆえに、詩人よりも多くを知ることはできない。このような人物は『青い花』に挿入されているメルヒェンの中で「書記」として描かれている。ノヴァーリスが至高のものとして掲げるメルヒェンと詩の説明を行いつつ、「計算と思考は同じ一つのものである」と述べた彼の算術的志向に歩み寄る。

・教員再研修のための協調学習支援基盤の構築および展望について

濱野 英巳, 倉館 健一, 板宮 朋基, 谷内 正裕, 江面 快晴

教育に携わるものにとって、定期的な再研修の重要性は自明であり、またそのような機会が実際に提供されているのも事実である。とはいえ、現場を取り巻くさまざまな時間的・地理的・経済的・社会的制約の中、再研修に赴くことは多くの教員にとって依然負担が大きいと言わざるを得ない。一方で言語学習を取り巻く社会状況は著しい変化を遂げつつあり、またICTも広く浸透してきている。自分の職業能力や将来に不安を感じる教員も少なくないのは当然であろう。実際、CEFRにまつわる制度的な変更は日本でも無関心でいられる状況ではなく、またBlended Learningや協調学習も外国語学習に溶け込みつつあり、再研修もこれらの流れに対応したものとなってきている。

しかし、この再研修自体の形態について振り返ってみると、非同期型・同期型の協調学習形態による運営についてはいまだ導入の事例は少なく、一般に集合授業で行なわれているように見受けられる。原因として考察されるのは、さまざまな制約から再研修が比較的小規模に行なわれていること、また技術支援を行なう母体がなく、状況に依存することが多いことに起因しているものと思われる。

慶應義塾大学外国語教育研究センターでは、これまで協調学習の外国語教育への応用研究に取り組んできたが、昨年度からは甲南大学と共同で、独文学会主催の教員養成・再研修講座に対して同期型の協調学習システムを提供し、接続拠点形成としての知見の収集を行なっている。また「外国語の授業におけるICTの活用」と題した学内の教職員対象のワークショップを定期的開催し、協調学習やWebリソースなどを扱う再研修活動を行っている。ここでは外国語教員の再研修のために行なってきた、協調学習基盤整備の試みについて概略を示し、問題点や潜在的な可能性などを整理してみたい。

教員再研修における協調学習基盤構築は、複言語・複文化主義や社会構成主義を背景として、外国語学習の環境を支えるさまざまな人員の互恵的学習コミュニティの形成を促すとともに、この共同体はこれまでの言語縦割りの状況を超える可能性を秘めている。また国内に留まらず、東アジア、その他の国と地域に広がる展望も見えてくることとなる。適時に適切な教員養成者を準備する困難を解消することに貢献することも、このインフラがもたらす重要な効果のひとつであろう。

シンポジウム I (14:30~17:30) B会場 (2階1021)

話しことば研究の射程

Tragweite der Erforschung gesprochener Sprache

司会：山下 仁，白井 宏美

本シンポジウムは2008年10月12日に岡山大学で行われた秋季研究発表会のシンポジウム「話しことば研究をめぐる4つの問い」の延長線上に位置づけられるものである。つまり、学習院大学人文科学研究所の「ドイツ語の話しことばに関する総合的研究」(研究代表者：高田博行)の成果に基づき、他の視点をも加え、「話しことば」研究の射程やその実践について、多角的に考えてみることを目的とする。岡山のシンポジウムは主として理論言語学の観点に立った問題提起であったが、今回は社会言語学や第二言語習得研究の観点から、実際のインタラクションで用いられた「話しことば」のデータを収集する際の方法論上の問題やデータの持つ意味などに焦点をあてる。

「話しことば」という現象は、研究の対象ではあるけれども、「話しことばとは何か」という問いそのものを取り扱うことはそれほど多くない。本シンポジウムの参加者もまた、それぞれの研究の目的があり、その目的のために「話しことば」を研究している。当然のことながら、それぞれの研究の目的によって、取り扱う題材、題材を収集する調査方法、データの処理方法は異なる。とはいえ、そこで共通するのは、「話す」という行為であり、具体的なインタラクションである。それはニューメディアによるものもあり、特定の制度内での場合もあるが、どの場合でも、データが **authentisch** であるかどうか議論の対象となる。つまり、本シンポジウムでは、「話しことば」の多様性に加え、研究方法の多様性を呈示し、その可能性について議論する。報告の題目とその内容は、以下のとおりである。

1. 中川報告：学術的コミュニケーションとしての「講演のあとの議論」の分析：コミュニケーション・ジャンルとしての議論の談話分析
2. 平高報告：日本語を母語とするドイツ語学習者の言語変種の変化—留学前後の発話データを手がかりとして—：日本語を母語とするドイツ語学習者の「話しことば」が、ドイツ語圏での滞在を経てどのように変化するか(しないか)について論じる。
3. 星井報告：教室内インタラクションにおける「自然な」コミュニケーション—遠隔授業システムを用いたテレビ会議を例として—：日本語を母語とするドイツ語学習者とドイツ語話者とのテレビ会議を手がかりに、教室内インタラクシ

ョンにおける「自然な」コミュニケーションについて考察する。

4. 白井報告：チャット・コミュニケーションにおける挨拶場面の特徴—日独対照研究—：文字メディアでありながら話しことは性が極めて高いチャットの挨拶場面を日独対照の観点から分析し、その特徴について論じる。
5. 山下報告：コミュニケーション行動における敬意表現の日独比較：ドイツと日本における実際の買い物表現を聞き手の判断に基づいて分析し、その特徴について考察する。

1. 学術的コミュニケーションとしての「講演のあとの議論」の分析 中川 慎二

学術的コミュニケーション(Wissenschaftskommunikation)として「講演の後の議論」を分析する。この議論はコミュニケーション上のジャンル(Kommunikative Gattung) (Luckmann 1988)と理解する。議論の組織上の構成(Ventola et al.(eds.)(2002))、参加者の役割分担(Rollenverteilung)、知識の伝達(Wissenstransfer)、「質疑応答」という協調作業について議論する。

講演とその後の議論は、それが組織上また形式上の制約を受ける(Ehlich u. Rehbein 1994)。しかも、講演そのものは学術的な書きことばの特性が強く、日常会話との乖離は大きい。議論の場面では、講演でなされた知識の伝達との参照関係、言語的結束性、講演者の文脈化(Gumperz 1982)が観察される。議論では、その言語使用がより対話的になり、学術的な話しことばの特徴を示しながら進行する。司会者、講演者、質問者、聴衆という参加者の役割が明確に観察され、司会者とマイクという媒介者とメディアが発言権の配分と深い関わりを持つことが特徴である。学術的コミュニケーションでの言語使用の特徴を、司会者、講演者、質問者、聴衆、場合によっては主催者との間でも進行する談話として分析する。その構成単位はミニ対話である。

2. 日本語を母語とするドイツ語学習者の言語変種の変化

— 留学前後の発話データを手がかりとして —

平高 史也

本報告は、日本語を母語とするドイツ語学習者の「話しことば」が、ドイツ語圏での滞在を経てどのように変化するかという点について論じることを目的とする。

一般に、言語学習者は学習中の言語を使う地域に長期間滞在すると、当該言語の能力が向上するといわれる。報告者は、その言語能力の向上とは何なのかを知り、また、それを向上させる要因まで知ることができればという素朴な疑問に導かれて、ドイツ

語学習者の海外渡航前後の発話データを収集してきた。これまでは語学研修で1ヶ月ドイツに滞在した学習者の渡独前後の発話データを素材としてきたが、本報告では、交換留学で1年ドイツに滞在した学習者の渡独前後のインタビューにおける発話データを比較分析する。

本研究は、①第2言語習得研究のうち、学習者言語変種 (Lernervarietät) を長期にわたって調査し、その変化を記述する研究、②学習中の言語を使う地域に滞在した学習者の言語変種を対象とした study abroad context に関する研究という、2つの性格を兼ね備えたものと位置づけることができる。

「話しことば」研究はさまざまな側面を含む広範な領域であるが、ここでは文法や語彙だけではなく、会話を産出、受容、理解するうえで生じる困難や問題を取り除くための方策である修復や聞き返しなども取り上げ、日本語を母語とするドイツ語学習者の学習者言語変種の変化の幅広い記述を試みる。

3. 教室内インタラクションにおける「自然な」コミュニケーション

— 遠隔授業システムを用いたテレビ会議を例として — 星井 牧子

教室内インタラクションは外国語学習の基盤となる重要な要因の一つと考えられているが、授業内における発話には「教師」「学習者」という役割に基づくある種の階層性があることから、教室内における「自然な」コミュニケーションとは何かという問いが考えられる。また、遠隔授業システムを用いたテレビ会議では、教室外のドイツ話者とリアルタイムでコミュニケーションを行うことが可能になり、教室内に目標言語を用いたある種の「自然な」コミュニケーション場面を持ち込むことができる一方、同じ空間を共有した対面コミュニケーションとは異なり、聴覚的・視覚的情報の不足、タイムラグ等の技術面の問題が生じるため、ここでも「自然な」コミュニケーションとは何かという問いが出てくる。テレビ会議の外国語授業への応用についてはドイツ語教育分野でもすでにいくつかの報告が見られるが、他の言語も含めてテレビ会議におけるインタラクションと言語学習に焦点をあてたものは少なく、本格的な研究はこれからだと言えよう。

本報告では、報告者が2007年度にベルリン・フンボルト大学と共同で行ったテレビ会議を用いたドイツ語授業場面から、タイムラグやアイコンタクトが少ないために生じるオーバーラッピング、「質問—答え—フィードバック」の構造のみられるシーケンス等を手がかりに、テレビ会議における学習者・ドイツ話者間のインタラクションを考察し、教室内インタラクションにおける「自然な」コミュニケーションにつ

いて再考したい。

4. チャット・コミュニケーションにおける挨拶場面の特徴

— 日独対照研究 —

白井 宏美

チャットはメディアとして確かに文字を用いているが、送信と受信がほぼ同時進行的に行われ参加者たちが時間を共有するということもあり、ニューメディアのなかでもEメールやメーリングリスト、掲示板などと比べて話しことば性が高いという特徴がある。

報告者は、言語系統が全く異なり、文化的・社会的相違も大きい、ドイツ語と日本語のチャットテキストを分析データとし、挨拶場面における日独間の相違を探った。その際に注目したのは、誰が最初に挨拶を行うのか、挨拶はいつどのような表現によってどれほど頻繁に行われるのか、挨拶の際のインタラクションにはどのような特徴があるのかという点である。

その分析からは、次のことが明らかになった。1) ドイツ語チャットでは、チャットルームに入室した人のほうから先に挨拶をする傾向があるのに対して、日本語チャットでは、すでに入室している人のほうから先に挨拶をする傾向がある。2) ドイツ語チャットの場合、挨拶が頻繁に交わされるのは、退室時よりも入室時のほうであるのに対して、日本語チャットでは、逆に入室時よりも退室時のほうが挨拶は頻繁に交わされる。3) 挨拶の際にドイツ語では呼びかけ語が多くの場合用いられ、日本語では少ない。4) ドイツ語では挨拶は二者間で交わされる傾向があるのに対して、日本語では多者間で交わされる傾向がある。これらの相違点は、基本的に日独の口頭コミュニケーションの反映と見ることができる。

5. コミュニケーション行動における敬意表現の日独比較

山下 仁

本報告は、対照社会言語学の枠組みで実施している日本語とドイツ語の敬意表現研究のうち、「話しことば」に関連する問題に即して、その調査方法や分析方法の一端を示そうとするものである。

報告者は、これまでドイツ語の呼称表現や依頼表現の問題をインタビュー調査やアンケート調査という方法を用いて分析してきた。また、日本語の「敬意」がドイツ語の“Höflichkeit”や英語の“politeness”とどの程度まで対応するのか、といった問題に取り組んできた。本研究では、まず「敬意」を含む評価概念のうち、日本とドイツで重

視されている概念を明らかにし、その中で最も重要と考えられる「丁寧」「親しさ」「距離」という概念を用いて、実際の参与観察によって得られた言語データを分析した。つまり、実際に行われた「相互行為」を聞き手がどのように評価したかを調査し、その評価を手がかりにしてそれに対応する言語表現、非言語表現を分析した。その背景には、これまでの研究が主として「話し手」の立場に立ち、「どのように言うことが敬意をこめた言い方になるか」という問題に取り組んでいるばかりであり、「聞き手」の立場に立った研究があまりなされていない、という批判的視点がある。

本報告では、この研究の成果全体を発表するのではなく、調査の概要、倫理的な問題、分析上の問題などについてまとめ、それらについて参加者と意見交換をしたいと思っている。

シンポジウムⅡ (14:30～17:30) C会場 (2階 1022)

Auto/Biographie

Erzähltes Selbst, erinnerte Bilder

Moderation : Michael Mandelartz, Eriko Hiroswawa

Seit den grundlegenden Aufsätzen von de Man (1979), Derrida (1980) und Manfred Schneider (1986, 1993) gehört die Autobiographie zu den bevorzugten Gegenständen neuerer Forschungsrichtungen wie Diskursanalyse, Dekonstruktion, anthropologische Literaturwissenschaft, Kulturwissenschaft und Genderforschung. Gemeinsam ist ihnen die kritische Haltung gegenüber der hermeneutischen und geisteswissenschaftlichen Tradition. Diejenige Gattung, die nach Dilthey „die höchste und am meisten instruktive Form [ist], in welcher uns das Verstehen des Lebens entgegentritt“, steht naturgemäß im Fokus der Kritik. In der japanischen Germanistik ist die Autobiographie in diesem Sinne noch kaum diskutiert worden. Das Symposium experimentiert daher mit verschiedenen theoretischen Ansätzen und gibt zugleich einen historischen Überblick über wichtige Stationen der Autobiographie in der Neuzeit.

Die Autobiographie arbeitet seit der Frühen Neuzeit an der Aporie, daß ihr Gegenstand umso mehr an Klarheit verliert, je genauer er ins Auge gefaßt wird. Das ‚Selbst‘, dessen Leben beschrieben werden soll, ist nicht an sich faßbar,

sondern allenfalls in seinem ‚Anderen‘. Die verschiedenen Formen autobiographischen Schreibens lassen sich daher nicht ohne weiteres in moderne und vormoderne Formen einteilen. Die ‚Krise des Subjekts‘ um 1900, an der sie sich scheiden sollen (Wagner-Egelhaaf), hatte ihre Vorläufer schon in der Reformation.

Im Pietismus verliert sich der Autobiograph in Gott, das Selbst stabilisiert sich in der Selbstvernichtung. Goethe ersetzt den protestantischen Gott durch die Welt, die das Ich prägt, ihrerseits vom Ich geprägt wird und als geprägte wiederum zurückwirkt. Trotz der scheinbaren Konvergenz von Ich und Welt in *Dichtung und Wahrheit* bleiben Goethes autobiographische Schriften jedoch „Bruchstücke einer großen Konfession“. Das 19. Jahrhundert rückt demgegenüber den Aspekt autobiographischer Einheit in den Vordergrund, die Dilthey schließlich in das Leben zurückprojiziert: Die Darstellung des geschichtlichen Zusammenhangs ist ihm „durch das Leben selbst halb gelöst“; das seiner selbst gewisse Individuum wird zur Norm, an dem sich das Leben zu messen hat. Schon bei Freud konstituiert allerdings nicht mehr der Autobiograph die Bedeutung seines Lebens, sondern die ihm unbewußten Mechanismen von Verdrängung und Verschiebung, und bei Benjamin erhält die Erinnerung ihre Bedeutung vom Vergessen her. In der weiteren Entwicklung ist das Leben nicht einmal als *eigenes* darstellbar: Kamei Katsuichiro gewinnt die Einheit seiner Biographie aus der (scheinbaren) Einheit der Autobiographie Goethes, und Handke beschreibt nur noch, wie er dem Erleben des Bruders ganz wörtlich nachfährt.

Im Zentrum all dieser Formen autobiographischen Schreibens bleibt das Selbst unaussprechbar und undarstellbar. Dargestellt werden allenfalls die Spiegelungen und Brechungen, die es von dem her erfährt, was es nicht ist.

1. Der Ursprung der neuzeitlichen Autobiographie

Luther – A. H. Francke – Goethe

Michael Mandelartz

Goethes autobiographisches Hauptwerk wird zumeist als Ergebnis eines entelechischen Bildungs- und Entwicklungskonzepts aufgefaßt, demzufolge das Individuum das Ziel der Entwicklung bereits in sich trägt. Damit wird Goethe der Rückgriff auf metaphysische Konzepte unterstellt, die zu seiner Zeit schon außer

Kurs geraten waren. Der Vortrag versucht dagegen, Goethes autobiographische Schreibweise aus Minimalannahmen über die menschliche Seele zu begründen, die sich aus der Umwertung der Lutherischen Religiösität ergeben.

Luthers Rechtfertigungslehre zwang die protestantischen Gläubigen, ihre Chancen auf göttliche Gnade durch andauernde Selbstbeobachtung zu überprüfen. Pietistische Autobiographen wie Francke fühlen sich zwischen dem kritischen Gebrauch der Vernunft und ihrer Verdammung als Werkzeug zur Selbstvergottung hin- und hergeworfen, bis der ‚Durchbruch‘ zu einer neuen Bejahung der Welt führt. Alle Erfahrungen werden positiv oder negativ auf den Glauben bezogen.

Das Werk des jungen Goethe steht mit dem Wechsel zwischen Selbstvergottung und Hingabe an Gott in dieser Tradition. Seit der frühen Weimarer Zeit scheint allerdings die Welt die Stelle Gottes zu vertreten. Daraus folgt, daß die Prägung der Seele nicht aus dem Jenseits erfolgt, sondern durch die konkreten Umstände, in die das Selbst hineingeboren wird. Die Göttlichkeit der Welt garantiert den sinnvollen Zusammenhang aller Ereignisse, ob sie dem Ich nun „widerwärtig“ oder „freundlich“ begegnen. Daraus ergibt sich die Haltung der „Weltfrömmigkeit“.

2. Ein Gegenkonzept zur literarischen Autobiographie?

Freuds Auseinandersetzung mit Kindheitserinnerungen Eriko Hiroswa

Freud vertritt die Ansicht, dass seine und die Erinnerungen seiner Patienten nicht immer den realen Ereignissen entsprechen, sondern vielmehr auf verdrängte sexuelle Erfahrungen bzw. unbewusste Phantasien verweisen. Den Realitätsgehalt von Kindheitseindrücken stellt er sogar insgesamt in Frage. Diesen theoretischen Ansatz wendet er auch auf die Analyse von autobiographischen Kindheitserinnerungen an.

In Freuds Aufsätzen *Eine Kindheitserinnerung des Leonardo da Vinci* (1910) und *Eine Kindheitserinnerung aus ‚Dichtung und Wahrheit‘* (1917) kommt sein Verständnis von Biographie/Autobiographie in einem engen Zusammenhang mit der Erinnerungsproblematik zum Ausdruck. Er deutet darauf hin, dass auch ein Genie dem universalen Naturgesetz unterliegt, demzufolge dem Subjekt die

Macht über seinen eigenen Ursprung entzogen wird. Die Schranken zwischen dem Genie, dem Normalen und dem Kranken verwandeln sich somit zur verschiebbaren Grenze.

In meinem Vortrag gehe ich der Frage nach, welche Implikationen solch ein Konzept der Kindheitserinnerung bezüglich der Auto-/Biographie haben könnte. In der klassischen, vom hermeneutischen Ansatz geprägten Vorstellung über die Autobiographie wird die organische Einheit von Leben, Erinnerung und Individuum als konstitutiv für die Lebensdarstellung betrachtet und somit auf die Repräsentation der Individualität Wert gelegt. So scheint dem hermeneutischen das psychoanalytische Auto-/Biographiekonzept auf den ersten Blick als völliger Gegensatz entgegenzutreten. Indem die beiden Konzepte als konkurrierende Diskurse der Auto-/Biographie aufeinander bezogen werden, sollte das Menschenbild etwas zugespitzt hinterfragt werden, das vom psychoanalytischen Diskurs entworfen wird.

3. Bemerkungen zur Funktion der Goethe-Biographie in Kamei Katsuichiros

Die Menschenerziehung

Satoshi Nagakawa

Mein Referat behandelt die essayistische Schrift „*Ningen Kyouiku – Goethe heno hitotsu no kokoromi*“ (1937) von dem bekannten japanischen Kulturhistoriker Kamei Katsuichiro (1907-1966). Nach dem Selbstverständnis des Verfassers ist das Buch allerdings „genau genommen keine Goethe-Forschung“, sondern vielmehr „eine Art von Autobiographie“, wie er später rückblickend schreibt. In Wirklichkeit kann man es wohl als eine Art auf Goethes Biographie basierende auto-/biographische Schrift bezeichnen. Indem Kamei im Hauptteil des Buches hauptsächlich Goethes Leben und Werk von der Phase des Sturm und Drang bis zur Klassik Schritt für Schritt beschreibt, versucht er, sich seiner eigenen Jugend zu vergewissern und äußert zugleich die Hoffnung auf eine geistige Wiedergeburt nach seiner politischen „Bekehrung“.

In meinem Referat möchte ich zeigen, wie Kamei aufgrund seiner Kenntnisse der Goethe-Biographie in der auto-/biographischen Schrift sein neues Leben inszeniert. Dabei besteht mein Hauptanliegen jedoch nicht darin, auf die Frage der „Bekehrung“ Kameis einzugehen. Interessanter und lohnender ist es, Kameis

Goethe-Buch, nicht bloß aus seinem persönlichen und existentiellen Hintergrund zu erklären, sondern wissenschaftsgeschichtlich im Zusammenhang mit der Problematik der Biographie zu betrachten. Denn es scheint methodisch an die Tradition der anti-positivistischen Goethe-Biographie in Deutschland anzuschließen. Dementsprechend zitiert Kamei öfters unter anderem Gundolfs „Goethe“ (1916). Unter Berücksichtigung dieses komparatistischen Aspekts sollen die Eigenart und Probleme der Goethe-Aneignung Kameis auch wissenschaftsgeschichtlich erklärt werden.

4. **Benjamins *Berliner Kindheit um Neunzehnhundert***

Zur Dialektik von Erinnern und Vergessen

Takao Tsunekawa

Die Bilder der Kindheit, die Benjamin aufzeichnet, stellen keine Erinnerungsbilder im gewöhnlichen Sinne dar, wie sie etwa dem Erwachsenen unvergesslich bleiben und woran er sich bei irgendeinem Anlass lebhaft erinnert. Das Referat versucht, die Charakteristik der Benjaminschen Erinnerungsbilder aufzuzeigen. Prousts unwillkürliche Erinnerung dient Benjamin nur begrenzt zum Vorbild. Er bemerkt, daß sie sich nicht ohne weiteres einstellt, insbesondere dann nicht, wenn es um die Erinnerung leiblicher Vorgänge geht. So weiß man z.B. nicht mehr, wie man gehen gelernt hat, wenn man einmal gehen kann. Andererseits sind Erinnerungsbilder oft Traumbilder aus der Kindheit, die dem Erwachsenen verloren gegangen sind, weil ihr Versprechen für die Zukunft nicht eingelöst werden konnte, und zwar, weil die reale Welt, die damals die Erfüllung verhinderte, nach wie vor repressiv bleibt. In Traumbildern spiegelt sich der jeweilige Zustand der Gesellschaft, sie sind nicht nur auf die Person des Erzählers bezogen. Im Schlußstück *Das bucklichte Männlein* legt Benjamin eine schöne Dialektik von Erinnern und Vergessen dar. Das Männlein treibe „von jedwedem Ding, an das ich kam, das Halbpast des Vergessens“ ein. Wen das bucklichte Männlein ansieht, der vergisst, was er erlebt hat; es kassiert das Vergessene ein. Aus den Bildern der Kindheit stellt sich das Männlein ein Album zusammen und schaut ab und zu hinein. Nicht der, der sich zu erinnern bemüht, sondern das bucklichte Männlein besitzt die Bilder.

5. Das Leben wiederholen

Zum Problem der Lebenserzählung bei Peter Handke Tomoko Somiya

In meinem Referat beschäftige ich mich mit Handkes Prosawerken *Wunschloses Unglück* (1972) und *Die Wiederholung* (1986), die in Handke-Biographien häufig als Beleg für seine Lebensgeschichte zitiert werden.

In *Wunschloses Unglück* erzählt Handke das Leben seiner durch Freitod ums Leben gekommenen Mutter. Die Erzählung ordnet sich zunächst der allgemeinen Gattung ‚Frauenbiographie‘ ein. Dabei wird die Mutter zu einer Figur ohne spezifische Identität, und die persönlichen Erinnerungen des Erzählers finden in dieser Form keinen Platz. Am Ende hat der Erzähler daher das Gefühl, noch nichts Genaueres über seine Mutter geschrieben zu haben. In *Die Wiederholung* erzählt der Ich-Erzähler von seiner eigenen Vergangenheit. In diesem Werk verwendet er keine bestimmte auto-/biographische Form; die Wiedergabe der faktischen Wirklichkeit interessiert ihn wenig. Den Fokus der Erzählung bilden vielmehr der Vorgang der Erinnerung und die Wiederholung bestimmter Lebensstationen. Das Erzählte weicht häufig von seiner faktischen Lebensgeschichte ab, aber der Ich-Erzähler setzt sein volles Vertrauen auf das Bild, das sich ihm aus der Erinnerung zeigt. Das Leben zu erzählen heißt hier, die Lebensgeschichte wieder herzustellen, sie gegenwärtig zu machen.

Im Hinblick auf diesen Übergang auto-/biographischen Schreibens möchte ich ausführen, wie Peter Handke sich mit der Lebenserzählung auseinandersetzt und wie diese Auseinandersetzung mit der Handkeschen Poetologie zusammenhängt.

口頭発表：文学・文化・社会 1（14:30～17:05） D会場（14階 1143）

司会：井戸田総一郎， 瀧井美保子

1. 18世紀後期の政治的家庭劇と初期ナショナリズム 菅 利恵

18世紀においては、近代的な親密家族のイメージが徐々に広められた。家父長の権威よりも互いの優しさや愛情によって維持されるこの親密家族のイメージと、これを土

壤にした道徳意識は、すでに指摘されてきたように、勃興しつつあった市民知識層の自意識の拠り所となった。見落としてならないのは、この時代、19世紀以降市民知識層にとってより強固なアイデンティティの支えとなってゆくナショナリズムもまた、準備されつつあったということである。ドイツにおける本格的なナショナリズムの展開は19世紀以降であるが、18世紀後半にも、教養市民層によってドイツ語やドイツ民族の歴史に対する関心が高められ、愛国主義的な言説形成や活動実践が始められていた。

18世紀後半のドイツ語圏における初期ナショナリズムの形成は、まさに同時期に進んでいた近代的親密家族像の広まりと、どのように関わっていたのだろうか。これについて、従来のナショナリズム研究においては十分な関心がいちたわられてこなかった。しかし実際には「国への愛」は、親密家族のイメージの中で強調された家族間の私的な愛情と、密接に結びつきながら育まれていったのではないだろうか。

本発表では、18世紀後期に書かれた二つの政治的家庭劇、すなわちフリードリヒ・シラーの『ドン・カルロス』(1787)と、A. W. イフラントの『帽章』(1791)を取り上げ、それらを「国父イデオロギー—Landesvater-Ideologie」に注目して分析する。それを通して、近代的な情愛家族像と初期ナショナリズムとの相関関係を明らかにする。

2. ドイツ民族主義と北欧

「郷土芸術運動(Heimatkunstbewegung)」と「血と大地文学(Blut- und Boden-Literatur)」における北欧文学の受容 中丸 禎子

本発表の対象は、19世紀末から第二次世界大戦終結までのドイツにおける、ドイツ民族主義と「北欧」の関係である。「郷土芸術運動」は、1890年ごろから1918年ごろにかけて展開された民族主義的・国家主義的な運動で、反自然主義文学・反近代文学の立場から、「大都市」の対概念としての「郷土」を賞賛し、「農民」の土との結びつき、郷土愛、家族あるいは血統を重視した。こうした傾向は、「血と大地文学」において頂点を迎え、ナチズムの思想的根拠を形成した。これらの運動において、「北欧」は、「ゲルマン民族」のルーツとして、すなわち、ドイツと「男らしさ」や「好戦性」を共有する「ゲルマン民族」国家であると同時に、急速に発展する工業化時代のドイツを補填する、「資本主義化以前の牧歌的世界」として、盛んに受容された。とりわけ、ノルウェーのハムスンやスウェーデンのラーゲルレーヴなど、北欧において民族主義的・反近代傾向を持つ「九十年代」文学への関心は高かった。

現在の近現代ドイツ文学研究においては、ナチス文学、北欧文学のドイツ文学に対する影響などへの研究は手薄である。本発表は、ドイツ文学研究に「北欧」という新

たな観点を導入すると同時に、民族主義文学・ナチス文学という、ドイツ文学の「知られざる」側面を提示することを目的とする。さらに、こうした文学の成立が、「生の歓び」や「良心」を描いたとされる北欧の「九十年代」文学の受容を背景としていたことを指摘することで、ナチス思想の複合性の一端を明らかにする。

3. 「ドイツ家庭文庫」

— その成立・発展、およびドイツ民族商業補助者連合とのかかわりについて —
竹岡 健一

発表者は、過去の学会・印刷発表において、ワイマール時代からナチ時代にかけて刊行された雑誌『かまどの火』を取り上げ、この雑誌とその作成元である「ドイツ家庭文庫」が有するファッション的な傾向と女性や家庭を意識した傾向という一見相矛盾する側面に焦点をあてながら、当時のドイツにおけるナショナリズムの高まりを考察する上でこの雑誌が有する資料的な価値を論じた。しかしながら、それは、1933年から1937年にかけてのごく限られた資料に拠る大まかな議論に留まっていた。

それに対し、今回の発表は、『かまどの火』の総刊行数のほぼ半分に相当する64冊の調査や二次文献の考察から新たに得られた情報に基づいて、「ドイツ家庭文庫」の特徴をより広い観点から詳しく跡づけようとするものである。具体的には、1916年以後のこの文庫の成立・発展と、その中で1926年に創刊された『かまどの火』が担った役割などについて、それらの活動全体の母体をなす右翼商業職員団体「ドイツ民族商業補助者連合」（1893年成立）の教育・出版事業や政治的動向とのかかわりを考慮に入れながら論じる予定である。

これにより、ワイマール時代における商業職員を中心とする中間層の右傾化や、ナチ政権成立に対する労働組合組織の対応事例を文学的な観点から考察する上で、「ドイツ家庭文庫」が無視しえぬ研究対象たり得るということを、改めて主張したい。

4. 批判理論のメディア戦略

アドルノによる〈ラジオの社会理論〉の構想をめぐって 原 千史

アドルノとメディアとの関わりと言え、ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』における「文化産業」論で、意識操作に着目して辛辣なメディア批判を展開している姿がまず思い浮かぶであろう。しかしながら、第二次大戦後のドイツに帰還したアドルノがラジオを通じて様々な言論・啓蒙活動を積極的行なった事実は意

外と知られていない。批判理論を唱える思想家の中でも彼は、群を抜いてメディアに多く登場し、講演や対談、学校放送など多方面にわたってラジオを駆使した。こうした姿勢には、アドルノがラジオを単なる副次的な表現媒体としてではなく、批判理論の浸透と通俗化ではない普及に役立つ社会批判と啓蒙のポテンシャルを秘めたメディアとしていかに重要視していたかがうかがわれる。

ラジオに理論的に接近する機縁となったのは、アメリカでの亡命時代、ラザースフェルトの主宰するラジオ調査プロジェクトの音楽部門への参画であった。プロジェクトでのテーマはラジオ音楽が聴取者に与える様々な影響であったが、そうした個別の経験的実証研究に先だってアドルノの根底にあった問題関心とは、〈ラジオの社会理論〉なるものの構想であった。本発表では近年公刊された『音楽の潮流 ラジオ理論の諸要素』などに基づきラジオというメディアにアドルノがいかに理論的に対峙したかを明らかにし、そこで得た認識をもとに実際に彼が戦後ドイツのメディア界で活躍した姿を見ていくことで、従来のメディア批判者としてのアドルノ像に、これまで注目されることの少なかった積極的にメディアを活用する教育者としての一面を提示して、修正を加えたい。

口頭発表：文学・文化・社会 2 (14:30～17:05) E会場 (14階 1146)
司会：小林信行, 遠藤紀明

1. **Der Sänger singt – aber wer erzählt?**

Sehen, Hören, Sagen und die Autorität des Erzählers im *Nibelungenlied*

Andrea Kuklinski

Dieser Vortrag untersucht aus der Sicht der Mündlichkeitsforschung den textimmanenten Erzähler als narrative Mittlerfigur des *Nibelungenliedes*. Der textimmanente Erzähler als fiktionale Stimme des Dichters ist eine Errungenschaft der Schriftlichkeit: in der reinen Mündlichkeit, die noch keine Gestalt gewordenen „Texte“ kennt, gibt es nur den konkreten Sänger-Dichter, der wenig Autorität gegenüber seiner Erzählung besitzt. Entsprechend entwickelt sich auch der Dichter erst in der Schriftlichkeit zum *Autor*; während er in der Mündlichkeit reiner *Traditor* bleibt.

Der Erzähler des *Nibelungenliedes* ist von der Forschung meist vernachlässigt

worden. In der Regel wird er einfach mit dem Dichter gleichgesetzt, der der mündlichen Überlieferung gegenüber offenbar kaum dichterische Freiheit besaß. Dieser Vortrag untersucht, inwieweit die textimmanente Erzählerfigur des *Nibelungenliedes* eine Verschriftlichung der *Traditor*-Funktion des mündlichen Sängers darstellt. Im Mittelpunkt stehen die Begriffe des Sehens, Hörens und Sagens, durch die der Erzähler beständig die Authentizität seiner Erzählung bekräftigt und als deren Subjekt er ein unpersönliches „man“ auftreten lässt. So entsteht allerdings der Eindruck, als ob der Erzähler nur berichten kann, was durch die audio-visuelle Wahrnehmung bzw. das kollektive Gedächtnis einer anonymen Masse autorisiert wird. In der Gestalt des Erzählers wird im *Nibelungenlied* die *Traditor*-Funktion des mündlichen Sängers ins Schriftliche verlängert; infolgedessen bleibt auch der Dichter, der noch kein *Autorist*, anonym.

2. „Entartet Geschlecht! Unwert der Ahnen!“

—Das moderne Irlandbild in Richard Wagners *Tristan und Isolde*

Asuka Yamazaki

Das 19. Jahrhundert ist eine Zeit, in der sich mit der Entstehung eines höheren Nationalbewusstseins eine Art des kulturellen Nationalismus herausbildete. Wagner erläuterte selbst in einer Reihe seiner Schriften die Notwendigkeit der Schaffung der eigenen deutschen Kultur. Sein *Tristan* entstand vor dem Hintergrund solcher zeitgenössischer Tendenzen. Das Referat soll versuchen, die Beziehung zwischen dem Staatsbild und dem Nationalismus im Werk mit Blick auf das Nationalbewusstsein näher zu beleuchten.

Wagners Darstellung Irlands in *Tristan* lässt sich durch das moderne Irlandbild erforschen. Ein Anhaltspunkt dazu ist die künstlerische Darstellung des Ire als „stage-irish“, der eine große Rolle in den populären englischen Theaterstücken spielt. Wagners Rezeption Shakespeares ist hierbei von besonderer Bedeutung. Hinzu kommen die Reisebeschreibungen über Irland, in denen der Gesichtspunkt von „Barbarei und Zivilisation“ vorkommt.

Man findet in *Tristan* eine Widerspiegelung der bis in das 16. Jahrhundert zurückgehenden Beziehungen zwischen Irland und England. Die gegensätzlichen Bilder dieser beiden Länder lassen sich im Rahmen des kulturellen dualistischen

Schemas begreifen und dienen wesentlich zur Unterstützung der Konstruktion des Werkes. Die daraus entstehende utopische und transnationale Gemeinschaft lässt nicht nur Rückschlüsse auf den kulturellen Nationalismus in Deutschland zu, sondern es lässt sich hier auch die Projektion von Wagners idealem Staatsbild finden.

3. 中世文学における「テキスト」と「挿絵」の相互関係に対する一考察

— 初期中高ドイツ語版『創世記』の挿絵を手がかりに — 浜野明大

初期中高ドイツ語で書かれた『創世記』(Die frühmittelhochdeutsche Genesis)は、ウィーン写本(Wiener Handschrift Cod. 2721)、フォーラウ写本(Vorau Handschrift)、ミルシュテット写本(Millstätter Handschrift)という三つの写本で傳承されている。

挿絵の傳承形態は三者三様であり、「テキスト」と「挿絵」というテーマで扱う素材としては実に興味深いものと言える。研究史の中で『創世記』の「テキスト」と「挿絵」の相互関係について言及したのは主にフォス、シュワプとグートフライシュ・ツィヘである。

フォスはミルシュテット写本の「挿絵」がどのような機能を果たしているのかという問題提起をしつつ、「テキスト」と「挿絵」の相互関係は依存関係にあるのではなく、独立していて、「挿絵」は「テキスト」の理解を深めるために書かれたものではないと主張する。

シュワプは「挿絵」と「テキスト」が相互影響にあるという推測をした。アブラハムの場面を例にとり、作者は挿絵画家と密な共同作業をして一つの『創世記』という作品を作りあげたというテーゼを打ち立てた。

グートフライシュ・ツィヘは「テキスト」が「挿絵」とは独立して最初に書かれ、後から「挿絵」を入れたのではなく、「テキスト」の方が後から「挿絵」に関連付けて書かれているという見解を持つ。

このように先行研究の見解は一致していない。そこで本発表では、メディア論的見地からも興味深いこのテーマをもう一度掘り下げて、『創世記』の「テキスト」と「挿絵」の相互関係から見えてくる中世メディア形態の一例を検証してみることにする。

4. ドイツ中世後期における Privatbriefe — その形式と機能 — 草本 晶

Privatbriefは、現代においては、おもに著名人によって書かれたものが書簡集として

刊行され、その人物の対人関係や思考、感情を直に知るための貴重な資料となっている。しかし、中世に書かれた手紙は、これをそのまま中世に生きた人々の内面を記録した資料として扱うことはできない。そもそもこの時代の手紙は、公的文書と区別がするのが難しいことや、書記、使者など介在者が多いことから、真に *Privatbrief* と言えるものがあるかどうか、判断が難しい。とはいえ、個人が個人に宛てて情報を伝達する、という条件の下では、個人的感情が表現される余地があり、当時の人々の内面に迫ろうというとき、手紙は重要な資料となりうるはずである。この発表では、中世後期に書かれた *Privatbriefe* について、その資料的価値をどのように捉えることができるのか探りたい。

まず、一般的な手紙の定義をしたのち、*Privatbrief* の特徴と機能を確認する。次に、中世後期のコミュニケーション事情や、歴史的・社会的背景を踏まえた上で、当時の手紙の特殊性を、形式と機能の面から明らかにする。また中世後期の *Privatbriefe* の一例として、15世紀初頭に（当時の *Lingua franca* だったラテン語ではなく）ドイツ語で書かれた、貴族の兄弟姉妹間で交わされた手紙を取り上げ、この資料からどのような情報を読み取ることができるのか、検討する。

口頭発表：語学1 (14:30~17:05) F会場 (15階 1153)

司会：宗宮 好和，富重与志生

1. 心的近さ・直接的知覚を軸とする原理について

三瓶 裕文

話者の「視点」と「対象(=注視点)」との間の「心的近さ」及び直接的知覚を軸とする原理が多様な言語現象の説明原理となり得ることの一端を、強い心的態度の表出としての指示詞、作中人物の内心の共同体験としての体験語法を中心に例証する。なお「知覚」は「具象的」だけでなく「抽象的・比喩的」な意味でも用いる。

テーマの性質上、先行研究は多岐にわたる。ごく一部の先駆的研究を挙げるにとどめる。理論的枠組みの端緒としては、「視点」を文法研究に初めて本格的に導入した大江(1975)、久野(1978)、認知・言語化の基点(Origo)の Böhler(1934)、時空の認知と言語表現の関係を論じた Wunderlich(1985)などがある。指示詞は、金水・田窪(1992)所収の諸論文、人称代名詞との対比において指示詞の機能を浮き彫りにした Bethke(1990)に刺激を得た。体験語法、物語論については、Steinberg(1971)、Stanzel(1991[1979])、また保坂宗重氏、鈴木康志氏らの一連の研究業績に多くを負い

つつ認知的な観点から光を当てる。

説明原理 (字数の都合で簡略化) :

話者の視点が対象に心的に近ければ近いほど、いわばより直接的に対象を知覚

⇒I. 直接的知識 → a. 話者にとって既知の(=テーマ的)対象に対して、

強い心的態度

→ b. テーマ的対象について記述

⇒II. 作中人物の内心・感覚を共同体験

2. ドイツ語新聞記事における言い換え表現について

稲葉 治朗, 勝田 由貴 (研究協力)

ドイツ語の新聞記事と日本語などの新聞記事とを比較した場合に目に付くのは、ドイツ語では同一指示物に対して様々な表現が用いられるということである。例えば、ある殺人事件を扱った記事を例にとると、日本語の新聞で犯人を指示する表現は、本名が提示された後には、「本名+容疑者」という言い方にほぼ限定されている。それに対して、同じ事件を扱ったドイツ語の新聞記事では、固有名や代名詞以外にも、der (mutmaßliche) Täter, der (25 Jahre alte) Mann, der Amokläufer, der Messerstecher など様々な表現のヴァリエーションが観察される。重要なのは、当該人物を描写するこうした様々な表現が、形式的にも補足説明の役割を果たす非制限的關係文・同格表現などとしてではなく(そのようにして生じている場合もあるが)、単独で主語や目的語など文中における項として生じうるという点である。

本発表ではまず、特定の出来事を扱ったドイツ語記事に見られる言い換え(再録)表現を調査し、その特徴を記述する。次に、英語や日本語などの記事における表現の仕方と比較し、その上で、言語間に見られる違いがどのような理由に拠るのかについて、各言語における文法的特質および優先される制約という観点から仮説を提示し、説明を試みる。

3. 16世紀後半における印刷技術と正書法の発展

植字工と読者の相反する関心事をめぐって

齊藤 和史

現代のドイツ文章語の成立に活版印刷の発明と普及がどのように貢献したのか?これは今日まで様々な議論されてきた歴史言語学上のテーマである。ここでは多くの場合、活版印刷と地方別に異なる書き言葉の平準化の関係が議論の中心であった。しかし方

言的書き言葉の解体はドイツ標準語の形成という過程のただの一面に過ぎない。本発表ではもう一つの重要な一面である「構造の強化」と活版印刷がそれに与えた影響について言及したい。さて、この「構造の強化」は正書法の分野では「異形の機能化」となって現われる。例えば <e> に対する <ä> という異形は「同じ形態素は同じ文字で書く原理」の為に、小文字に対する大文字という異形は語種の区別の為に機能的な役割を与えられたのである。最近の研究では、このような「異形の機能化」は文法家によって上から押し付けられたものではなく、16世紀に印刷の現場で植字工よって生み出され、「職人の技」として印刷言葉の中で定着していった、と考えられている。しかし実際にはそう簡単に事は運ばなかつただろう。なぜなら当時の植字の現場において「機能的な正書法」は植字工の技術的な関心に様々な点で相反したからである。発表では1598年に4つの都市(Augsburg, Ingolstadt, Konstanz, Neisse)で印刷された説法を調査した結果を元にこれを実証する。ではそれでも「異形の機能化」をはじめとする「機能的な正書法」が印刷言葉の中に導入され、普及したのは何故なのか？ 答えの一つを工房の外、つまり同時代の読者の関心の中に見出すことはできないだろうか？

4. 意味変化の記述へ向けて

— 移動動詞をはじめとする辞書記述の分析 —

薦田 奈美

意味変化の現象については、社会言語学や心理言語学などの新しい知見を採り入れるようになって、ようやく本格的に説明されるようになった。しかしこれらの新しい研究領域には、意味変化に関わると考えられる、メタファー・メトニミーなどの言語現象を捉える観点に、意味変化の要因・メカニズム・背景など、統一性が見られないという問題がある。従って、意味変化現象全体を、新たに統一的な立場から捉え直す必要があると考えられる。

本発表では、具体的な記述方法への足がかりとして、認知言語学的観点からのアプローチに基づいた分析を行う。対象を新たな概念領域(domain)で捉え直すという認知的営みと、場の状況からの推測に基づいた主観的な解釈が、話し手と聞き手の相互行為の中に存在し、新しい意味の発生に何らかの役割を果たしていると想定することで、意味変化現象を考察するためのモデルを構築し、これによって一定の傾向や法則性を導き出すことを試みる。

例えば**brausen**や**sausen**のような、音の放出を示す動詞、あるいは**fegen**や**wischen**といった除去活動を示す動詞が、いずれも移動動詞としての意味を持つようになったと

いう変化では、同じ移動動詞への変化でも、人間の認知活動上に現れる焦点の働きによって、異なった過程を経た意味変化現象であると説明し得るであろう。このような辞書記述に対する考察を基に、意味変化現象の説明のための一試論として、人間の認知的営みという通常、共時的説明の枠内に留まっている視点を通時的言語現象に採り入れることの有用性を示したいと考えている。

第2日 5月31日(日)

シンポジウムⅢ (10:00~13:00) B会場 (2階 1021)

カフカ・シンポジウム

— カフカ、プロート、ホーフマンスタール、ショーレム、ツェラーン

司会：吉野 英俊

このシンポジウムは、カフカ自身、カフカのもっとも身近にいた友人であり、最初のカフカ全集の編集者プロート、同時代人であり、カフカの初期作品に少なからぬ影響を及ぼした大作家ホーフマンスタール、少し後代のユダヤ神秘主義を専門とする歴史家ショーレム、一世代ほど後の、出自を同じくするがカフカとは異なり第三帝国を経験した詩人ツェラーン、このようなカフカに対してさまざまな時間的・空間的距離にある諸人物とカフカとの関わりを見ることによって、いわばカフカという磁場の広がりを見ようとするものである。

第一発表。カフカの保険局での14年におよぶ業務、たとえば諸企業の危険等級リストの作成、企業家たちの異議申し立てに対する回答、年報の執筆、危険防止策の考案などが激職であったことを示し、その間に書かれた諸作品の中に職場の現実が入り込む様を見る。

第二発表。全集初版あとがきにあるプロートの『アメリカ』解釈は、オクラホマの野外劇場が「最終章であり、小説は和声的な響きのうちに終わる予定」だというカフカの言葉にもとづいている。だが、それはカフカの『日記』の記述に矛盾することが指摘されて以来、プロートの『アメリカ』解釈は微妙に揺れ動く。彼の揺れ動く解釈の変遷をたどり、彼とカフカ、両者の見解を吟味することによって、プロートの解釈の問題点を明らかにしようとする。

第三発表。世紀末に起こったユーゲントシュティールという表現形式は、一口に言えば「装飾過多の文化から身体を解放するもの」と言えよう。「自由な運動」と「むきだしの身体」が賛美された時代である。この二つの要素を兼備した「自由舞踏」はこの表現形式の最高の形態であった。ところで、ホーフマンスタールやカフカのテキストには「身体表現や身振り」が散見される。彼らのテキストをユーゲントシュティールという背景の中に据えることによって、新たな視点からこの二人の作家にとっての「身体」の意味を考察する。

第四発表。ショーレムのカフカ像は、彼とベンヤミンとの間で交わされた往復書簡

で鮮明になる。ベンヤミンの求めに応じて彼は二度カフカ解釈を記している。彼はカフカの作品にみとめられる「掟」の実行不可能性と「真理」の到達不可能性を神秘主義的な傾向と同一視している。本発表では彼の両親の世代との軋轢と葛藤という新たな視点を加えて、彼のカフカ理解に新たな意義づけをする。

第五発表。ツェラーン文学は多種多様な言語文化を織り込んだ綴れ織りである。カフカもまたツェラーンの詩の生成に深く関わっている一人であるが、彼にとってカフカは血肉化していると考えられることのできるためか、先行研究は手薄である。ツェラーンにはカフカをテーマとする学位論文を提出する計画があり、その時から集中的にユダヤ思想関連文献を収集している。本発表では、カフカや彼に関わる同化ユダヤ思想家たちとツェラーンの詩の生成との関わり、その受容の意味を示したい。

1. 労働者傷害保険局員としてのカフカ

吉野英俊

カフカの作品、作家カフカに関しては夥しい数の研究がある。それに対して労働者傷害保険局員としてのカフカはまだ研究が十分に進んでいない。この発表はカフカが携わっていた業務内容を示し、と同時に職場の現実が彼の作品の中に入り込む様子を見ることを目的とする。

カフカは1908年8月に一般保険会社から労働者傷害保険局に転職する。間もなく草案委員に任命されたカフカの主たる業務は担当管区の手工業、工業部門をその危険度に応じて14の等級に区分し、それに対して企業家たちが異議を唱えれば、保険局の立場から法律的な注釈を加えて回答することであった。企業家たちには法律顧問がついており、異議と回答のやりとりが数年におよぶこともあったという。これは多くの書類に目を通さねばならない激職であった。そのほかにもカフカは保険局年報の執筆、保険局を代表しての講演(1910年)、木材加工業や石材業の危険防止策、自動車保険の考案などにも携わっている。

このような職務と並行してカフカはその作品のほとんどすべてを書いている。彼の作品には、とりわけ三つの長編小説には職場の現実の痕跡がみとれる。それは単なる着想の発端以上のものである。彼の職業世界と文学世界とは意外に太いパイプを通して気脈を通じあっている。

2. ブロートとカフカの『アメリカ』(失踪者)

長田 浩

フランツ・カフカの『アメリカ』(失踪者)は、彼の死後4年たった1927年にマックス・ブロートの編集によって出版された。周知のように『アメリカ』という題名はブロートによるものである。そればかりでなくブロートは、後の原典批判版では断片として扱われている章を「オクラホマの野外劇場」という題名をつけた上で最終章とした。ブロートによる『アメリカ』をめぐる解釈は、この最終章が中心となっている。発表でもここに焦点をあてて、これまで正面からあまり取り上げられることのなかったブロートの『アメリカ』解釈を年代順に検討する。

ブロートの初版の後書きによれば、こうした章立ては、これが最終章であり、小説は和声的な響きのうちに終わる予定だと、カフカ自身がブロートに語ったことによる。しかしながら、これは1915年に書かれたカフカの日記の叙述と矛盾している。ブロートは1946年の第3版の後書きでもこの点に触れていなかったが、1954年の彼によるカフカ伝の中でようやくこの矛盾の可能性を認めた。さらに1959年のカフカについて論じた自著で、ブロートはふたたびこの矛盾について取り上げている。しかし今度は彼の新しい解釈を持ちだして、初版の後書きと日記の間には矛盾がないことを主張している。こうした一連のブロートの解釈が孕んでいる問題点を論じてみたい。

3. 世紀転換期の身体・舞踏文化 ホーフマンスタールとカフカの視点から 金子祥之

世紀転換期の装飾過剰文化から身体を解放する。ユージュントシュティールという表現形式を一言でまとめるとこのようになるといえよう。なかでも運動性とむき出しの身体とに基づく芸術表現である舞踊は、運動性と身体性という二要素を兼ね備えているという点において、ユージュントシュティールの芸術がとりうる最高の形態であった。実際この時代は、イザドラ・ダンカンやルー・デニスの様な舞踊家や、ダルクローズの提案した集団体操などが「ユージュントシュティールのセンスを共有するもの」として多くの芸術家・作家・批評家の関心をとらえた時代であった。批評家や文学者達はこぞって舞踊や衣装をテーマとした文章を綴り、文化的流行現象へと発展させていった。また、演劇実践という側面から考えてみても、文学的言語の支配下から俳優の身体を解放するという観点から、パントマイムやダンス、軽業、コメディ・ア・デラルテなどの運動する身体表現が、新たな表現の可能性として見直された時期でもある。

ホーフマンスタールやカフカのテキストに散見される身体表現や身振り表現への関

心は、このような当時の時代思潮を自らの言語表現活動の中心へと昇華させようとする意思の表れであると考えることが出来る。本発表では、このようなユージェントシュティールの身体表現文化のなかに両者のテキストを配置しながら、身体に対してそそがれる両者の視線の意味を考えてみたいと思う。

4. ゲルショム・ショーレムのカフカ理解

石原竹彦

本発表ではまずはじめに、ユダヤ神秘主義の研究者であるゲルショム・ショーレムがフランツ・カフカの物語世界をどのように理解したのかを明らかにする。カフカに関するショーレムの言説は、『教訓詩』、ヴァルター・ベンヤミン宛の『書簡』、『10の非歴史的テーゼ』に認められるが、本発表ではベンヤミン宛の『書簡』に集中する。そこで用いられているショーレム独自の概念「教典を解読できない弟子」、「啓示の無」に着目し、ショーレムのカフカ解釈がユダヤ神秘主義の啓示概念に基づくものであることを確認する。

次に、そのようなショーレムのカフカ理解が、いかなる歴史的意義を持ち得るのか考察を試みる。ここではシュテファン・モーゼスの見解に耳を傾けたい。ショーレムがカフカの物語世界に見たものは、掟が完全に意味を失い、しかしそれでもなおお掟が基準点として通用する世界である。このような世界は、モーゼスによると、20世紀初頭のユダヤ人青年に共通の世界観であるという。同化の第二世代であるフロイト、カフカ、ショーレムは、「掟」、すなわち民族の伝統が彼らに要求するものに対して危機意識を共有していたとモーゼスは仄めかしている。果たしてモーゼスの見解は妥当であろうか。

実際のところショーレムは、カフカやフロイトと異なり、形骸化した掟の支配を体験したことがない。むしろそのような世界を、彼は自らが研究の対象とするユダヤ神秘主義の発展史のうちにはじめて見たのである。本発表ではこのことに着目し、ショーレムのカフカ理解の意義づけを試みる。

5. パウル・ツェラーンのカフカ受容

富岡悦子

ツェラーン文学は、多種多様な言語文化を織り込んだ綴れ織であり、たとえばその縦糸には旧約聖書、ダンテ、シェイクスピア、ジャン・パウル、横糸にはシュルレアリスト、バッハマン、ザックスなどの作品が複雑に織り込まれている。その中でもカフカの散文作品、遺稿、手紙はツェラーンの詩空間全体に播種されている。その一方で、ヘルダーリン、リルケ、マンデリシュターム、ハイデガーに較べると、カフカの

受容を扱う先行研究は、伝記的調査と蔵書調査を除けば、手薄であるとの感は否めない。1990年代からの2種類の歴史校訂版の刊行にもなう蔵書調査、書簡の公開、毎年刊行されるツェラーン研究の量と質から考えると不思議な現象とも見える。この現象は、ツェラーンにとってカフカ文学は対象化することが困難なほど血肉化しているためであろうか。ここでは、ツェラーンの公刊された詩作品に限定せず、翻訳、散文、遺稿を概観する形でカフカ文学との関わりを考えてみたい。さらに、カフカと関連の深いユダヤ人思想家の著作との関連にも言及することになる。その上で、ツェラーンにとってカフカ文学の受容がどのような意味を持っていたかを提示したいと思う。

口頭発表：文学・文化・社会 3 (10:00～12:35) D会場 (14階 1143)

司会：佐藤 俊哉，渡辺 徳美

1. ヘルダーとレンツにおけるケーニヒスベルク 今村 武

本発表は、18世紀ドイツ語圏に始まるシュトゥルム・ウント・ドラングを担った詩人のうちとりわけバルト海沿岸地域と関連の深いヘルダーとレンツを取り上げる。ロシア領バルト海沿岸地域からケーニヒスベルクを経て、フランスのシュトラスブルクで疾風怒濤が開花することに着目し、両者のケーニヒスベルク、ドルパト、リガ、シュトラスブルク時代の作品と啓蒙的な実践活動を比較検討し、ケーニヒスベルクがこの文学の展開において果たす役割を考察する。90年代より活発化するバルト海沿岸地域におけるドイツ文化研究の成果を援用しつつ、ヘルダーとレンツに共通するケーニヒスベルク体験を18世紀の汎ヨーロッパ的な文化史・思想的な観点から検討する必要性は高いのである。

この時期に始まる天才概念の使用、文学作品の素材あるいは舞台としてのケーニヒスベルク、バルト海沿岸地域と「ドイツ」を結び付ける啓蒙の都市としてのケーニヒスベルクの機能に焦点を当て、シュトラスブルクを舞台としたシュトゥルム・ウント・ドラング詩人の活動の核心部分が、バルト海沿岸地域における体験、ケーニヒスベルクにおける啓蒙思想の摂取にある。レンツの活動はとりわけヘルダーを模範として触発され展開されていると推測される。両者に共通する植民地から被占領地への出立を促す契機となるケーニヒスベルク体験と思想的背景、それらの文学的昇華の関連を明らかにしたい。

2. 『子どもと家庭のメルヒェン集』の「十二人兄弟」(KHM9)における二重構造

田中 千裕

「十二人兄弟」は、グリム兄弟により編集された『子どもと家庭のメルヒェン集』(KHM) に収められているメルヒェンである。

J. ボルテと G. ポーリフカによる KHM 注解では、「動物の姿に変えられた兄たちが妹によって救われる」というモチーフが、「十二人兄弟」と「七羽のカラス」(KHM 25) と「六羽の白鳥」(KHM 49) に共通する「主旨」とされている。アールネ=トムソン(AT) 及びアールネ=トムソン=ウター(ATU) による話型分類も、この見方の延長上にある。両者によると、上記三話は AT (ATU) 451 「兄弟を捜す娘」という同じ話型に分類されている。

だが、ある話で問題になっていることについて考えるには、話上で具体的に展開される一連の事柄のみでなく、話の構造もまた考慮されなければならない。後の二話が一重構造であるのに対して、「十二人兄弟」は二重構造となっている。KHM の中で「十二人兄弟」と似た構造を持つメルヒェンに、「雌ガラス」(KHM 93) がある。しかし、「雌ガラス」では話の前半部を後半部の準備段階ととらえられるのに対して、「十二人兄弟」では後半部が前半部の成功の否定から始まる。「十二人兄弟」の二重構造は、単に下位構造が二つ重ねられていることで、「七羽のカラス」と「六羽の白鳥」と異なる構造になっているのではない。

「十二人兄弟」では、互いを脅かしあう状況に置かれている兄妹が、死からの互いの奪還により、この状況を克服するということが問題になっている。そして、そのことが一直線上で展開するのではなく、深化として起こっている。この点で「十二人兄弟」は、「七羽のカラス」と「六羽の白鳥」と異なる。

3. フンボルトの教養理念について —ギリシア観と形式的教養— 石澤 将人

近代ドイツの知識階級に大きな影響を与えた「教養」という理念には、その理想像としての「ギリシア的なもの」が絶えず伴っていた。ドイツを古代ギリシアの後継者とする見方が近代の国民形成に際して利用され、「ギリシア的なドイツとラテン=ローマ的なフランス」という構図の下、国内に広く行き渡ったことはよく知られている。だが、各思想家がどのような教養理念を抱いていたか、そしてその合わせ鏡としてのギリシア観がいかなるものであったかについては、これまであまり注目されてこなかった。本発表では、こうした教養とギリシアを結びつける潮流の淵源となった新人文

主義の思想圏内からヴィルヘルム・フォン・フンボルトを取り上げ、プロイセンの教育改革を通じて後世に多大な影響を残した彼の教養理念とギリシア観との関係について考察する。

その際に特に着目されるのが、言語を「有機体」としてとらえ、言語こそ民族の精神であるとした彼の言語思想である。フンボルトはこの言語思想から古典語（特にギリシア語）の習得を通じての人格の陶冶を「形式的教養」として重要視していたが、この形式的教養こそ、後にフリードリヒ・ニーチェが連続講演「われわれの教養施設の将来について」において、やはりギリシアを模範とする「古典的教養」へと至る準備段階として評価したものであった。両者の形式的教養の位置づけの違いがどこに由来するののかという問題についても、同じくギリシア観に支点を求めつつ併せて検討したい。

4. ゲーテ『悲劇ファウスト』における「最高の美」

— 「曇り」としてのヘレナ試論 —

平松 智久

従来の研究において、ゲーテ『悲劇ファウスト 第二部』（1832）「第一幕」「第三幕」のヘレナは、概してそれぞれ別様の存在として捉えられてきた。例えば、G. ディーナーの見解によれば、最初は「半現実」としての「魔法の産物」であった彼女は、後に、「冥界から甦った」「現実のヘレナ」として現れる。A. シェーネも、これらをラテルナ・マギカの幻像としながら、「第三幕」のヘレナに関しては「肉体化した本物」と認めた。

それに対し本発表では、両幕で彼女が「霧」の中に登場する点に着目し、〈ヘレナは一貫して「曇り」である〉という仮説から出発する。では、「第一幕」ではファウストが彼女に触れた途端に爆発が起こるのに、なぜ「第三幕」で彼はヘレナを愛しうるのか。また、たとい「美」が直接に感覚可能だとしても、なぜファウストはヘレナという「最高の美」に接して猶も最期の言葉を口にしない（あるいは口にできない）のか。そもそも本作では「美」がなぜ「曇り」において現れてくるのか。

本発表は、ゲーテ『色彩論』における「曇り」概念を手がかりに、「第三幕」における二人の邂逅場面の叙述形式を分析することを通じて、「最高の美」の意義を探る。この試みは最終的に、作品全体における「美」の諸相を「救済」問題との関連で解明することを目指す。ヘレナの「美」と「救済」に関わる「美」の問題との間には、密かな意義転換が存することを見逃してはならない。

1. ハイネにおける「もてなし」(Gastfreundschaft)のモチーフについて

立花 哲雄

「もてなし」というモチーフは、ハイネの作品のなかにそんなに頻繁に出てくるわけではないが、重要なモチーフであり、ハイネ理解の上で有益なヒントを与えてくれるのではなからうか。

初めに文化現象としての「もてなし」に関して、その発展から衰退まで歴史的展開(古代ギリシアからヨーロッパ中世およびそれ以後)を簡略に述べる。その後、ハイネの作品に即してこのモチーフがどのように取り扱われているが論じる。悲劇『アルマンソール』から「もてなし」のモチーフに関連する場面を選び、その風習の衰退とそれを嘆く悲しみに触れる。次にナポレオンのイギリスへの亡命希望との関連において「客の権利」(Gastrecht)の拒否という問題について考察する(『ル・グラン書』ほか)。ハイネ晩年のロマンセ、コルテスによるメキシコ征服を取り扱った『ヴィッツリプツリ』においては、文化の華ともいふべき「もてなし」が客を欺く手段として使われる。最後にこの「もてなし」のモチーフが亡命詩人ハイネにとって如何なるものであったか考察する。周知のように、彼はフランス政府から年金という形で支援を受けていた。その事実が報じられたとき、彼の言論活動に対して批判が噴出した。それに対する抗弁においてハイネはフランス政府から受けた「もてなしのよさ」(Gastlichkeit)を誉めたたえている、このことに注目したい。

2. 原体験の象徴としての他者

メーリケ『画家ノルテン』における「ジプシー」女性像について

野端 聡美

E.メーリケの小説『画家ノルテン(1832)』における、主人公テオバルトを取り巻く調和的な人間関係の破壊とそれに続く悲劇的な結末の真因は、「ジプシー」であるエリーザベトの登場である。ロスキーネとエリーザベトの母娘は、市民社会に生きる男性を魅了する一方で、彼らと関係を持つことにより自らも破滅する。本発表では、作品中の「調和の破壊者」である「ジプシー」女性はどのような意図のもと描かれている

か考察することを目指す。これまで、エリーザベト像をメーリケのペレグリーナ体験に依って解釈することが一般的であった。しかし、当時の文脈における「ジプシー」女性像を踏まえて分析されることは稀である。ロマン主義以降の、迫害と称賛という両面的な「ジプシー」受容は、エリーザベト並びにロスキーネの作品中の役割を考察する際に本質的な手がかりとなる。異質な女性との接触は、文学作品の典型的モチーフの一つであるが、そこには社会の優位的な立場にある男性達の、意識されることのない「他者」への希求があるからである。作品中の「ジプシー」女性像に特徴的なのは、「自らの破滅を引き起こす激情」、「本能としての放浪」の他、「男性の原体験の体現者であること」が特に注目に値する。かつてその接触によりテオバルトに芸術的感覚を喚起したエリーザベトが、成長したテオバルトの社会生活に原初の荒々しさを持って再び介入することにより、混乱と破壊を引き起こす。マジョリティーの代表である市民社会の男性が、かつて自らの本質を形作り、その後の社会生活の中で無意識に抑圧した原体験を、「ジプシー」女性というマイノリティー中のマイノリティーに投影するという行動様式をここから洞察することが可能である。

3. Über die Bedeutung Hölderlins für Georges Poetik in den Gedichten

„Hyperion I-III“

Kenichi ONODERA

Der Vortrag untersucht den Einfluss von Friedrich HÖLDERLINS Poetik auf Stefan GEORGES Werk, v. a. auf dessen drei „Hyperion“-Gedichte (1914). Dieser Einfluss wurde bisher überwiegend in Bezug auf Hölderlins spätere hymnische Dichtung erörtert, jedoch kaum mit Blick auf dessen Oden und Elegien, mit denen George sich ebenfalls intensiv beschäftigt hat. In einer detaillierten Analyse von Georges „Hyperion“-Triade wird nun der Nachweis geführt, dass George das gesamte späte Schaffen von Hölderlin überblickt, einige von dessen Techniken aufgegriffen und sie in seinen eigenen „Hyperion“- Gedichten verwandt hat, so etwa das Mittel der adoneischen Klausel oder – bei der Verwendung des Pentameters – das einer Akzentuierung im Sinn von Hölderlins Poetik der „Zäsur“. Des Weiteren wird die Frage diskutiert, inwieweit George im dritten Gedicht dieser Triade versuchte, hinsichtlich des Metrums, des Klangs und des Satzbaues jener Verbindung von Nüchternheit und Enthusiasmus in der Tonart nachzueifern, die Hölderlin dem erhabenen Gegenstand seiner „hymnischen Gesänge“ angemessen fand. Es wird dargestellt, wie in Georges Gedichten auch

ohne die Übernahme von Hölderlins komplizierten freirhythmischen Konstruktionen eine ähnliche Stimmung erzeugt wird. Abschließend wird zu zeigen versucht, dass der Gedankengang in dem in Anlehnung an Hölderlinsche Hymnen triadisch gebauten Gedichtzyklus nicht nur eine dialektische Struktur aufweist, sondern auch die Entwicklung der Poetik Hölderlins von der lyrischen Ode über die Elegie zum „hymnischen Gesang“ – gleichsam in Abbrüchigkeit – nachvollzieht.

4. カタルシスの歴史哲学的意義

ヨルク伯によるギリシア悲劇解釈

森田 園

パウル・ヨルク・フォン・ヴァルテンブルク伯が生前に公表した唯一の論文「アリストテレスのカタルシスとソフォクレスのコロノスのオイディプス」(1866/以下カタルシス論と略する)を主要なテキストとしながら、ヨルク伯の歴史哲学においてギリシア悲劇が、とりわけその効果としてアリストテレスによって提示されたカタルシス概念が、いかなる役割を演じているのかを明らかにすることが本発表の主題である。この論文でヨルク伯は、悲劇の本質がカタルシスであることを起点にして、ギリシア悲劇の歴史的意义を考察している。ヨルク伯によれば、ギリシア的生の固有性は神意識と自己意識の統一と分裂の関係によって規定される。カタルシスによって生じるエクスターゼは、この二つの意識の分裂を回復する試み、神の想起の試みなのである。カタルシス、そしてその本質であるエクスターゼは、神を失った人間的意識の前提なのであり、だからこそそれは悲劇の上演によって反復されなければならない。これがヨルク伯によるギリシア的生にとっての悲劇の(歴史的)意義にほかならない。このような解釈は、ヨルク伯自身が問題にしていた現代の(キリスト教的)意識との対比によって可能になるが、この対比によってこそヨルク伯の歴史哲学が構成されることになる。最終的には、彼の試みが、二十世紀初頭にルカーチらによって展開されるギリシア悲劇の(美学的解釈とは区別される)歴史哲学的解釈の先駆となることを示唆したい。

1. 心態詞の背後にある認知的枠組み

— 平叙文に現れる心態詞の分析 —

宮下 博幸

心態詞を扱った研究はこれまで豊富に存在し、そのような研究により、個々の心態詞のさまざまな機能についての知見が蓄えられてきた。従来の研究は、主に個別の心態詞を出発点として分析を行っている。しかし心態詞は現れる文タイプがそれぞれ決まっていることが知られているため、特定の文タイプに注目して、そこに出現する心態詞を包括的に扱うというアプローチもありうる。このようなアプローチは、そこに現れる心態詞のそれぞれの意味的寄与の相違が、よりはっきり浮かび上がる利点があると考えられる。このような視点での研究は、これまで疑問文 (König 1977, Abraham 1995) については見られたものの、平叙文については見当たらないようである。本発表ではそれゆえこの文タイプに着目し、特にこの環境でよく用いられる心態詞である *ja, aber, doch, halt/eben, schon, auch* を扱いたい。その際これらの心態詞をグループとし、それぞれの基本的機能を一つの枠組みから包括的に説明することを目指す。そのようなモデルとして提案するのは、心態詞を含む発話を発する話し手と、その発話が向けられる聞き手とを含む認知モデルである。このような認知モデルの仮定のもと、これまでの心態詞の研究にも依拠しながら、上記の心態詞の機能を統一的に考察する。最終的にこのモデルで示される機能が、それぞれの心態詞の核の機能となっていることを示すことで、このモデルの有効性を示したい。

Abraham, W. (1995): Modalpartikeln in Fragesätzen. Restriktionen und Funktionen: die Nullhypothesen. In: Schecker, M. (Hrsg.): Frage und Fragesätze im Deutschen, Stauffenburg, 95-109.

König, E. (1977): Modalpartikeln in Fragesätzen. In: Weydt, H. (Hrsg.): Aspekte der Modalpartikeln, Niemeyer, 115-130.

2. ドイツ語を母語とする幼児の心態詞習得

牛山さおり

心態詞 (Modalpartikel) は、Kutsch(1985)や Rost-Roth (2004) など言語習得の観点で付随的に研究対象となったこともあったが、発達心理学や心の理論といった観

点から、幼児言語を対象とした日本語の終助詞習得研究（綿貫 1997, 村木 2004 など）が盛んであることに比べ、ドイツ語母語話者の心態詞習得を扱った先行研究は、現時点ではほとんど確認されていない。

そこで本研究では幼児言語データ交換システム *Childes* を使用し、ドイツ語を母語とする幼児の心態詞習得の段階を数量的に比較し、音響解析を行う。具体的な目標としては、(1) どのようなプロセスで心態詞的用法は習得されるのか (2) 心態詞 *doch* と *doch mal* はどれくらいの月齢で現れ、どれくらいの頻度があるか (3) *doch* と *doch mal* が月齢を重ねるにつれて音声的にどのように変化するか、の3点が挙げられる。

加えて使用した幼児の発話データには“*Guck doch mal!*”などのように、いわば無意識のうちにチャンクのような形で心態詞を使用していると考えられるケースも見られたため、時間的な余裕があれば、このような例を構文文法的に実証する可能性にも触れる。

幼児は心態詞を周囲のインプットから模倣して使う段階から、使う意図を意識しながらの段階に移行していくという習得プロセスを経ることが予測される。幼児の発達心理と言語獲得という枠の中で心態詞習得を捉えることにより、新たな研究上の視点が見出されることを示す。

3. 時間節の階層性と談話との接点

高 裕輔

Taka & Mori(2008)では時間接続詞 *nachdem* と *bevor* を用いた複合文について、含意される因果解釈は非対称的であり、一義的に *nachdem* は *Ereignis* 間の、*bevor* は *Modal* を含む *Proposition* 間の因果関係を導入することを示した。またその非対称性を副文が取る命題の「大きさ」の違い、階層性の違いとして分析した。一方で *nachdem* 節が *Modal* を取る可能性も指摘した。

本発表では、*nachdem* の解釈に関して、多義的な解釈をもつ *während* との対比により、*nachdem* 節も *Ereignis* や *Modal* だけではなくさらに「広い」命題を取り、談話との接点としての機能を有することを示す。具体的には、時間接続詞に導かれる副文が談話内での解釈を動的に進行させることを示す。

すでに *nachdem* 文は *während* のように逆説的・譲歩的な解釈を持ちうることが指摘されている((i)(ii))が、この解釈は接続詞に連結された二つの文の意味的対比を基盤としていることが第一の証拠である。

- (i) *Nachdem Peter gestern seine Freundin besucht hat(te), wird er morgen ins Theater gehen.* (Herweg 1990: 232)

- (ii) Nachdem er gestern seinen Restlohn wieder nicht bekommen hat, will er morgen nach Feierabend doch wieder auf die Baustelle gehen. (Steube 1980: 39)

第二の証拠は副文内に等位接続詞相当の文副詞 *aber* が生起する例が見つかることである。

- (iii) Das "Bundesgesetz über die Abgeltung von Lehr- und Prüfungstätigkeiten an Hochschulen" etwa erreichte am 3. Oktober das Parlament, nachdem die Begutachtungsfrist aber bereits am 29. September abgelaufen war. (IDS)

副文であるにもかかわらず文相当であるということは、Ereignis や Modal より意味的に「広い」Illokutionを表していると考えられる。

口頭発表：ドイツ語教育 (10:00~12:35) G会場 (15階 1156)

司会：伊藤 真弓, 松澤 淳

1. ドイツ語母語話者の言語調整と学習者の理解プロセス

— 少人数グループレッスンを例として —

石塚 泉美

外国語授業は、さまざまな要因が影響を及ぼしあう多層的で複雑な認知活動の場である。そのため、より効果的な授業を設計するためには、まず授業における「教授・学習プロセス」について理解を深める必要がある。しかし、日本のドイツ語教育研究において「教授・学習プロセス」が主要な研究対象として取り上げられることはきわめて少ない。

こうした状況をふまえ、本研究では少人数グループ授業で受講者がドイツ語母語話者の発話を理解できないシークエンスに着目し、その原因の推定およびその際に双方の側で起きている認知プロセスの再構成を試みた。

調査は、早稲田大学オープン教育センター設置科目「ドイツ語コミュニケーション」において2学期間にわたっておこなわれた。調査の妥当性を高め、調査対象を多角的にとらえるために、授業のビデオ録画・録音、フォローアップ・インタビュー、質的アンケートという3種類の方法を複合的に用いた。

これらのデータを組み合わせて分析した結果、会話中心のドイツ語授業では、母語

話者が学習者に合わせた適切な言語調整ができないという問題が、学習者の理解プロセスを妨げるひとつの大きな要因となっていることが明らかになった。さらに、学習者の理解を助けるためになされた試み（日本語の使用や言い換え）が逆に学習者を混乱させることが多いという問題も浮き彫りとなった。

本発表では、学習者が母語話者の発話を理解できない場面を単なる「コミュニケーション上の障害」ととらえるのではなく、それを「学習の機会」として役立てる可能性について検討したい。

2. Das Curriculum als Hypothese: 5 Jahre Evaluation im Intensivkurs Deutsch der Juristischen Fakultät der Keio Universität

Michael Schart

Die seit den 90er Jahren intensiv betriebenen Forschungen zur Rolle subjektiver Theorien beim Lehren und Lernen von Fremdsprachen verdeutlichen, wie stark das berufliche Selbstverständnis von Lehrenden, ihre individuellen Werte, Erfahrungen und Überzeugungen die Konzeption und die Wahrnehmung des Unterrichtsgeschehens prägen. Wird Unterricht als ein soziokultureller Prozess gedacht – und nicht als ein technokratischer Akt, der sich durch Methoden und Materialien steuern lässt –, erscheint dieser Einfluss der Individualität ebenso notwendig wie wünschenswert. Zugleich bringt er für Lehrende offensichtliche Beschränkungen mit sich, wenn es darum geht, die Auswirkungen des eigenen didaktischen Handelns zu erkennen. Hierfür bedarf es eines distanzierten und selbstkritischen Blickes. Jede didaktische Maßnahme, sei es nun eine einzelne Unterrichtsaktivität, ein neues Lehrwerk oder – wie im vorliegenden Fall – das Curriculum eines gesamten Kurses, sollte daher als eine Hypothese betrachtet werden. Für die wissenschaftliche Disziplin Deutsch als Fremdsprache bildet die systematische und kontinuierliche Überprüfung solcher Hypothesen eine zentrale Aufgabe. Der Vortrag zeichnet diesen Prozess am Beispiel einer longitudinalen Evaluationsstudie nach, die im Intensivkurs Deutsch an der Juristischen Fakultät der Keio Universität durchgeführt wurde. In einem multiperspektivischen Forschungsansatz, der über die Kooperation von externen und internen Forschenden Methoden der Evaluations- und Aktionsforschung zusammenführte, wurden unterschiedliche Aspekte des Programms kritisch beleuchtet.

3. リズムと身体性を重視した発音練習の可能性

— 実験授業「ドイツ語のリズムにのろう！」を通して —

三ツ石祐子, 林 良子

言語が人間関係(性別や年齢、社会的地位等)の枠組みの中で、自分と他者とのコミュニケーションを通して習得されるものであることから、発話行動が明確なシチュエーションが設定されているロールプレイングが、学習者の発音練習に有効であることは、既に多数報告されている。これは、学習者にとってバラバラであった個々の発音規則が諸要素と関連付けられることで、実際の会話の中での機能を総合的に認識することを促し、且つ、これによって記憶の負担が軽減されることを示している。しかし、日本の大学における授業では、ドイツ語発音練習においては、個々の音や単語までの練習が主であり、それ以上の単位での練習が行なわれることは稀である。

本発表では、「詩文のリズムを、身体動作を通して教授する」ことに重点を置いた実験授業を通して、参加者のドイツ語の音読がどのように変化したかについて、音声データを分析した結果を報告する。実験授業参加者は、19歳から60歳までのドイツ語初心者からZMP取得者までの8名(男性5名、女性3名)であった。実験授業開始前と終了直後に録音した音声データを分析したところ、授業終了後の音読データにおいて、発話速度、声の抑揚や強弱について大きな変化が見られた。また、文アクセント位置も正しいものが増えたことが観察された。さらに、参加者によるアンケート結果もあわせ、このような発音練習の効果と可能性について述べる。

4. ERPを用いたドイツ語無声子音の認知

— 日本語母語話者の聴取に関する一考察 —

伊藤 直子, 島崎のぞみ

外国語学習における音声面での母語干渉に関する研究の多くは、調音面を対象としており、聴取時の干渉については未解明とされる部分が多い。

そこで本発表では、ドイツ語母語話者によって調音された音声を刺激音として、内的・外的な刺激に対して生じる脳内の電位変化、すなわち事象関連電位(ERP)を利用した実験結果に基づき、日本語母語話者による聴覚情報処理系の営みの一端を探ることを主旨として考察を行う。

実験では、無声の破裂音/p/, t/・破擦音/pf/, tf/・摩擦音/f/, /j/の子音群に、母音/a/を後続させた6つの刺激音を被験者に繰り返し聞かせ、35回加算した。分析は、城生(『日本語音声科学』, 1998)に基づき、語音の識別に関わるとされるERP成分のN1及び

P2 に着目して行った。

「音素・音節検出実験に基づく音声知覚の基本単位の検討」(林・笈, 1989)では、対象を日本語として、母音を/a/とした CV 音節の刺激音を用いて認知速度に関する実験を行った結果、破裂音が摩擦音に比して速い反応を示すことが明らかにされている。今回の実験では、N1 出現時の遅速差の検証により、林らの研究に加えて、ドイツ語の子音も日本語と同様の順序で認知され、摩擦音の位置づけには両者の中間的な傾向があることが新たに判明した。

また、実験直後の面談を通して得られた情報を元に、言語音として内省される際に母語干渉を受けていると判断される場合にも、大脳の認知レベルでは識別されていることが確認されたことから、今後のドイツ語学習支援に向けて、聴取に関する指標についても言及したい。

ブース発表 (11:30~13:00) H 会場 (14 階 1141, 1148)

(ブース発表は同時進行です)

1141 : 方言レベルの音声データに見られる多様な縮約形 (Kontraktionsform) について 藤井 雄吾

ドイツ語の「標準発音」とは、議論のある概念であり、Stock (2001) に概括的な記述があるように、ドイツ・オーストリア・スイスなどの広域的「標準ヴァリエント」が観察される一方、ドイツ国内でもアナウンサーの発音などに様々な地域的な特色が見られる。旧東独ハレの研究グループによって進められた調査・研究に基づく "Großes Wörterbuch der deutschen Aussprache" (1982 第 5 版) (GWdA) の記述は、より現実的なものとして知られるが、GWdA では、*-en* 及び *-el* 語尾などのセグメントの縮約・同化の度合いが発音のスタイルの違いとして三段階に区分され、また頻出する単語・形態素の縮約形なども挙げられている。

今回のブース発表では、仮に「標準発音」とされる枠内で分析された縮約・同化などの音声記述を踏まえて、方言レベルで更に多様な形で現れるセグメントの脱落現象を Phonai Bd. 5 の録音サンプルから選び、音声分析ソフト PRAAT を使って提示しながら分析し、議論してみたい。

例えば、*haben wir* の音声表現形 [heβ`ʷi:] (Kiel) と [hɑ:mɐ] (Cham) では、全く異なった音形になっているが、その際、縮約・同化といった音声変化のプロセ

スだけでなく、屈折語尾の方言固有の形態、頻出するフレーズにおける音形の固定化、歴史的過程など様々な要因を視野に入れる必要がある。

1148 : „Also, der Lars sagt, ...“ - Flüssig sprechen lernen – Lernmaterial für Lernende auf dem A1- und A2-Niveau Bertlinde Vögel, Anja Hopf

Michael McCarthy vertrat bei seinem Vortrag *Spoken fluency revisited* und seinem Workshop zum gleichen Thema auf der JALT-Konferenz im November 2008 die These, dass folgende drei Punkte entscheidend dafür sind, ob Fremdsprachenlernende als flüssige SprecherInnen erlebt werden:

- Benutzen von *chunks*
- *smallwords* („[...]small words and phrases, occurring with high frequency in the spoken language, that help our speech flowing, yet do not contribute essentially to the message itself.“ (Hasselgreen 2004, 135) Beispiele: *well, right, all right, okay, you know, I mean, sort of/kind of...* (Hasselgreen 2004, 163)
- geschicktes Reagieren beim Sprecherwechsel.

Angeregt von diesen Ideen präsentieren die Referentinnen zusätzliches Lernmaterial zu den Lehrwerken „studio d A1“ und „studio d A2“ (beide Funk u.a. 2005, 2006 Cornelsen Verlag). Sie enthalten Dialoge, bei denen die Aufmerksamkeit der LernerInnen auf oben erwähnte Elemente der Sprache gelenkt werden. Um die Wortwahl empirisch begründen zu können, wurde das Häufigkeitswörterbuch von Jones/Tschirner (2006) herangezogen.

Hasselgreen, Angela (2004): *Testing the Spoken English of Young Norwegians. A study of test validity and the role of „smallwords“ in contributing to pupils' fluency.* Cambridge: CUP.

Jones, Randall L. und Erwin Tschirner (2006): *A Frequency Dictionary of German. Core Vocabulary for learner.* London, New York: Routledge.